

# ヨーハン・カール・アウグスト・ムゼーウス著『ドイツ人の民話』

## まえがき四編

鈴木満訳・注・解題

我が畏友、思想家にして、\*\*市の聖ゼーバルト教会<sup>(1)</sup>

聖物保管係<sup>(2)</sup>ダーフィット・ルンケル殿に捧げる緒言

J・K・A・ムゼーウス著

私ども著述家は夜なべ仕事の所産に付ける序文を、親愛なる読者諸賢、あるいは、いとやんごとなき江湖<sup>こうこ</sup>の皆様に通常奉呈つかまつるもの。が、私は幾つかの妥当な理由からかかる慣わしを断念いたします。ちゃんとした観点に立つてくださるよう読者にあえて懲<sup>しやうぼう</sup>漚<sup>う</sup>いたり、多くの者がやることですが、柄<sup>ワ</sup>付き<sup>ル</sup>観劇<sup>ネ</sup>眼鏡<sup>ト</sup>や眼鏡を用意して読者をお迎えいたすほど私はあつかましくありません。なぜならこうした行為は畢竟、本の読み手など一人残らず近<sup>ちか</sup>眼<sup>め</sup>だ、と決めつけているようなもの。また、己<sup>おの</sup>が作品を得得<sup>とくとく</sup>と自慢するほど嗜<sup>たしな</sup>みに欠けているわけではありませんし、いとやんごとなき江湖の皆様<sup>皆様</sup>に序文で声を張り上げるにははにかみ屋過ぎます。皆様、市場で品物の呼び売りを

やっている行商人風情ふうせいにいやいやご注意をお向けあそばす、といったあんばいなのですから。そこで私は、畏敬する友よ、作家として抱えている関心事のうち目下心に懸かっていることをただ貴下のみと論ずる所存。

私が——全ドイツもまたしかりですが——貴下を存じ上げるに至ったのはダニエル・ホドヴィエツキイ(3)のお蔭に他なりません(1)。その際貴下のご容貌(4)が大いに私の気を惹き、ために私は貴下の精神ガイストが有する様な能力にぞっこん惚れ込んだ次第。貴下の目つきで狡猾かつ詮索好きでいらっしやるのがまざまざと分かります。丸い、ぐっと前に張り出した額は、理性という黄金の林檎りんごが三つの精神活動オペラテオネンテイニスを行うために十二分の余地がある白銀の深鉢ふかばちですし、つんと反った鼻は遠くから臭いを嗅ぎつけるたぐいでしょう。薄い唇と尖った頤おとがほ——これはかしながらどちらも精神的諸特性よりも心情的諸特性を示唆しているかな。従って私はこれについて判断を下すことは差し控え、吟味検証は、私が初めてご知遇を辱かたじけなくした折、貴下が求愛をなさっておられたお相手であるいとしき人、あるいは、今のご配偶になられたか、とも存ずるお方にお任せいたします。お申込みはなるほど一言も聴こえはしませなんだが、貴下の身ごなし総体から推察つかまつるに、あれは高い次中音テノールで開陳、加うるに、一語一語理性の秤皿で計量した言葉を大いに慎重かつ精確に薄い唇から洩らされたのでしようね。

かような諸能力に恵まれておられるなら、貴下は、眼前にご覧の小著に関し、私の心情を吐露するのに願つてもない人物でいらっしやる。

もし貴下がありきたりの型の聖物管理係——これは取りも直さず普通人のお一人ということですが——でいらっしやるなら、書名をちよいと眺めた時、やりきれない物思いが貴下の脳裡に浮かんできたかも。いわく、こんながらくた、何の役に立つんだ。昔話メルヒェンなんてのは、子どもたちをおとなしく眠らせるために考え出されたおふざけだが、分別のある世間様全般を楽しませるものじゃあない、とね。しかしながら、事をもっとよく調べもなさらず、そうしたひど

く歪んだ見解を下してしまふ、というのは貴下には似合わぬ仕儀、と貴下のご容貌が私に保証しております。思弁的頭腦の持ち主にして人間観察者たる貴下のこと、人間の精神ガイストは仕事と楽しみを絶えず追求しているが、その隣人にして同居人たる胃袋が飲食を欲する場合と全く同様、ああた、こうだ、との選り好みはあまりしない、との観察を疑いも無くとつくになさったことでしょう。しかしながら、どちらにも、むかつきとんざりを回避するため、時折は変化を要求する、ということもね。精神ガイストの快適な仕事と楽しみ向けに定められている当今流行の書物がどんな具合になっているか、お分かりになるだけの多大な文学的知識を貴下はお持ちのはず。そうではなくて、聖ゼーバルト教会の鍵類管理のご職務が——こりや、さもありなん、ですが——貴下の認識を広める障害となっていたとすれば、この最近十年というもの、流行はやりの書籍産業においてはげに厭わしき感傷愛好癖が蔓延マシ、ために、我がドイツの三文文士諸氏の心の衝動が巻き起こした嵐が読書界に数多あまたの多情多恨の出版物を吹き送り、その数たるや、昔むかし南の熱風が葦の海から鶉うぐいすの群をイスラエルの民の宿営地に投げ落としたよりも夥おほしい、と貴下に告げるに吝おこかではありません。しかしり而して、往古のイスラエルの民同様、ドイツの読者たちもこうした粗食にむかつき、楽しみに対する時代の欲求に従い、変化を渴望しているのも別段訝いぶかしくはないですね。かような願望を叶えるのはまことに安易簡単。私見ながら、暫時五官を憩やすませ、めそめそした緩徐曲アダージョにけりをつけ、空想力ファンタジーという魔法の角灯ラング「幻灯機」<sup>(10)</sup>によって、退屈たいくつきつている世間の皆様を壁に映る美しい影絵の数数でしばし楽しませる時機が到来したのではありますまいか。

我が畏敬するルンケル殿、空想力ファンタジーなる玩具が精神ガイストにも十全な楽しみを与えてくれるものかね、とか、あるいは、肯綮こうけいに当たる別の言い方をすれば、民話フォルスマルヘンが読書界において多情多恨文学に比肩するだろうか、などと貴下が疑念を起おこされるなら、人間学に極めて無知無学なることを露呈なさったことになりましようぞ。さような疑念は人間の魂ゼレ「心情」の性質をこれまでろくすつば考究なさったことがない証拠。考究なさったのであれば、貴下は経験か

ら以下のことを学ばれたはずなのですから。すなわち、空想力こそ取りも直さず人間精神の最愛の幼な友だち、魂ゼレがいとけない茨さやから萌もえ初めてより、晩年肉体諸器官が凋かれ萎しびるまで、生涯を通じて最も信頼できる仲間なのです。昔話メルヒェンが、つまり不思議なお話が空想力ファンタジーを煽り立てると、子どもはお人形や木馬や太鼓といったお気に入りの玩具を放り捨て、横丁一番の腕白小僧でも静かにおとなしく座って、何時間も一心不乱に注意を払い、じつと聴いているではありませんか。本当のできごとが語られると飽き飽きしてしまい、できればすぐさまかの有益なシュレックから逃にげ出してしまふののですよ。不思議なこと、突拍子とつぱしもないことへの愛着は私たちの魂ゼレの奥底に根ざしているのです。決して根扱こぎにされることはありません。空想力ファンタジーは魂ゼレの下層の能力の一つに過ぎぬとは申せ、丁度可愛いお女中がお邸おぼろの殿方輩ぼろに何でも言うことを聞かせてしまうことがよくあるように、理性を支配してしまうこともしばしば。人間精神ガイストはいつも事実に満足しているたぐいのものではありません。精神ガイストの限らない働はたらきは、その活動を遙かに、仮定の、あり得べきことどもの領域にまで及ぼし、天空を船で帆走、海原を犁すまで耕かします。もし空想力ファンタジーのありがたい影響力が存在しないとしたら、我がドイツの思想家、文人、夢想家、予言者といった熱狂的種族はどうなることやら。けれども、物事に冷やかな理屈屋殿ですら、しばしば空想力ファンタジーとしてっぼり差テ・タし向トかいにおなりあそばし、ありそうなことと本当にあることをごちゃまぜにし、楽しい夢想を育んでいらつしやる、あるいはまた、その哲学的探求精神を養うため、異国の魔法の角灯ランゲン「幻灯機」の発明の数数を利用なさる。なぜなら、人間が現実世界の様な状況に応じてどのように思考かつ行動するかに注意を払うだけではなく、我らの父たちの言葉を借りれば「許容され過ぎておる」情緒的快楽を探求することも、人間学研究に相応しく、思想家の観察に似つかわしいことは疑いを容れません。我らの父たちとて、事情や情勢が違っていたら、観念的世界においては、同じ意見を表明することでしょう。

かような次第ですから、畏敬する友よ、昔話メルヒェンと呼ばれる空想力ファンタジーの戯ガイスれは精神を楽たのしませるのにもとよりこの上な

く好適であり、いとも尊敬すべき読者各位が、多情多恨のめそめそ文学の代わりに、フォルクスマルヘン民話で心娛しまれても、そうした取替えついで失うものは何一つ無いであろうことが、これで貴下に明白白となった、と存じます。少なくとも既に経験が教えてくれたのですが、イタリヤの読者の皆様はカルロ・ゴツツイ氏のフォルクスマルヘン民話を極めて好意的に迎えました。氏はそれらに芝居の衣装を着せたのです。さて今はもう、本書見返しの寓意的な装飾画を解釈なさることは難しくありません。もし、前述のごとき啓蒙が無ければ、この意味を汲み取ろうと貴下の思索的頭脳をいかに駆使されても、徒勞に終わったことでしょうが、理性の精レグニウスがぼつちやりした美女である空想力ファンタジーに親しげに体を摺り寄せて、これと一緒に相手が夢見た魔法の宮殿の領域を逍遙しているのだ、ということは一目瞭然。換言すれば、こうもあろうか。空想力ファンタジーがここでもやはり我々が時代の風潮に倣い、理性と駆け落ちするところだ、ってことは一目瞭然。

かかる親切的な啓蒙に加え、更にもう一つ助言を差し上げても、要らぬお世話ではない、と存じます。これらのフォルクスマルヘン民話の語り手たる私が、読者の皆様を別の音色に調律してしまおう、と企んでいるのではないか、なんて貴下がうかうかと邪推なさるかも知れません。しかしながらクロップシュトゥックツクがその勢威・名望の限りを尽くしたにも関わらず、彼が公にした正書法規範によってたった一字たりとも動かすことはできませんでした。名も無い三文文士ごときが江湖の好尚をおこがましくも別の方向に誘導するなんてとんでもない。お聞きあれ、友よ、事はこういう次第なのです。

たくさんの、そして一部は著名な人士たちが、尊敬すべき書籍工房「作家」を奔命に疲れさせている読者の熱狂が冷えないよう、娯楽文学の世界に新分野を開拓しなければ、という欲求を既にはっきり認識し、できる限りこれに対処しよう、と努めております。陳腐に成り下がった多情多恨から変幻極まりなき空想力ファンタジーの戯れへと本好きな世間の皆

様を引き戻そう、と我らドイツ人の中で初めて思いついたのは、学識高きフォス学校長——教会と学校は繋がりがありませんから、この名前は貴下もご存じかも知れませんが——なのです。彼は有名な東洋の『千一夜物語』をいささかも余計な薬味を加えずに素早く温め直してくれました。このごった煮料理「ごたまぜ」<sup>(19)</sup>は新鮮さという佳味はとつくの昔に失くしていましたし、フォスの厨房で——いや、全くの話が——それを取り戻したわけではないのですが、この訳業が迅速に成功を収めたのは、この厨宰が江湖の好尚のために当座お凌ぎの御料理を配膳したのは適切な判断だった、というなよりの証明。同一時期に石鱈作りのビュルガー君<sup>(20)</sup>（2）は同じ動機から同様の課題に着手しました。素材全体を溶かし直し、独自の構成によって、江湖のご期待を裏切らないような製品を作り出す、という意図の下。もともと、火が消えるのが早すぎたのか、材料を煮沸し過ぎて台無しにしてしまったのか、未だにしかるべき濃度に達していないのか、要するに、今日に至るまで彼はまだきちんと約束を果たしておりません。にも関わらず、この場合成サムト志サバソレニテ充分ナリと申しておきましょう。何ゆえかかる歴史的慣用句をここに引用するのかを、このことからご推論を。

貴下はヴィーラントの『オーベロン』<sup>(21)</sup>をご存じでしょうか。この輝かしい流星は、聖ゼーバルト教会の高い粘板岩葺き屋根の後方なる貴下の低いお住まいの狭苦しい地平においても必ずや光芒を放ったはず。さて、そもそもこの詩は、一万八千ないしそれ以上の韻から成る美しく韻文化された昔話に他ならないのであります。それにです、大陸の気高き女性君主は、最近お世継ぎに擬せられるお孫様方に役立てよう、また彼らを楽しませようと、潑刺とした想像力の成果を实らせたではありませんか。

同じ部門に分類される幾つかの所産のかような競合は、書籍界の好尚に十中八九一種の革命を惹き起こすことになるであろうことは、聡明なる思想家でいらつしやる貴下がお気づきにならぬわけはありません。してかように蒙を開

かれた貴下には今やご理解戴ける事柄を、ニュルンベルクなる賢明なラスベは独自の思惑により既に数年前から洞察していたのです。彼はオーノア夫人の「妖精文庫」の古色蒼然たるぎこちない翻訳を九巻の新版として逸早く出版いたしました。この版全部が、あるいはその内一巻が反古同然になってしまふのでは、などといささかも懸念せずかね。

こういう次第ですから、畏敬する友よ、容易にお分かりになりましようが、当節風昔話を語ろうというこの人物「ムゼーウス」が己が功労だと誇れるのは精神のところ、娯楽文学界の新たに開墾された耕地の一角に、昔話の多種多様な属の内で、ドイツの駄作家がだれ一人犁を入れようとは考え及ばなかつた。民話を手作りしようとして、ちつぽけな自分の地所を圃い込んだ程度のこと。ところが意地悪な隣人が登場、この御仁、新参の移住者が円匙と鋤でせつせと働いているものですから、自分もその隣にお御輿を据えて、同じもくろみを引つけ、この人物の稼業に参入しようと思いつき、不作も降雹も予想せず、そそくさと収穫の成果を復活祭市の商品目録に掲載、次の秋の市に並べる、と広告する(3)ではありませんか。それゆえこの人物は、しかるべき根柢のある優先権を守らんがため、そして庇護者殿、貴下の被保護者かだれかの亜流に過ぎないのではないか、あるいは、既に他の人の所有になっている(パトロヌス<sup>(20)</sup>)。

着想を追っているのではないか、といったご嫌疑を貴下が抱かれぬよう、己が資格証明として二つの市の狭間にその落穂拾い「拾遺」を出荷する必要が緊急にある、と考えた次第です。そしてこれこそ、敬愛する友よ、通常市に並べる物産がまだ熟さない時期にこれらの紙束を貴下がお受け取りになる理由なのです。ちなみにこれでお分かりでしょう、作家の功名心なるものがいかに感じ易く繊細な、細心の手入れを必要とするような植物であるかが。大体この二人の語り手は全然お互いの邪魔にはならないのですがね。なぜなら、ベルリンの例の御仁は翻訳を約束しているだけですが、こちらは、眼前にご覧のごとく、祖国ドイツ特産のご馳走。我ら両名の片方が一籠の鶏を、もう片方が鶯鳥どもを市に運ぶのはどうってことはありません。これらは双方とも家畜、というか、家禽の仲間ですけれど、



それでも同じではありませんもの。

更に私はね、畏敬するルンケル殿、我らが袂を分かつ前に、何もかも貴下の好意あるご判断にお縋りする私のこと、貴下がこうした問題を誤解なさらぬよう、貴下のおつむの中のあれこれを訂正しておこう、と存じます。かようにご指摘申し上げるは、ご覧の物語の本質・形態・調べ・釣り合いに関すること。

民話は大衆小説ではありませんし、日常生活で本当に起こり得たかも知れないことどもを物語ったものでもありません。民話は世界を純化しているのです。そして、想像力が、それらが必要とする限り、真実だと認めるあるお定まりの前提条件の下でのみ、存在を許されたものです。民話の形象は、空想力が働き掛けた個々の民族の時代、風俗、物の考え方、なかんずく神神の神統譜や「妖精・魔物などの」精霊についての知識に応じて、多種多様です。けれども民族的性格は、各民族の無意識的な創作と同様、民話にも顕現している、と私には思われます。趣向の豊かさ、豪勢かつ過剰に満ち溢れている奇妙奇天烈な綺羅・裝飾が、東洋産の布地や物語の特色ですし、仕上げはざつとで、構成は軽妙平明、これなん、フランスの妖精物語や工場制手工業製品というわけ。そして、秩序、調和、手堅い構造、これこそドイツ人の作る道具と、ドイツ人の文芸なのです。

さてまた 民話 童話 でもありません。なぜなら、言うまでもなく、民族と申すものは子どもたちから成っているのではなく、専ら大人たちから成っているのですから。そして日常生活では、子どもと話す場合と大人と話す場合は話題が異なるのが普通です。そういう次第ですから、昔話は全て『鴛鳥おばさんのお伽話』の子ども向けの調べで物語られねばならないなんてお考えなら、とんでもないこと。貴下はご職掌から申さば管式風琴の調べとは何の関わりもない——ゲッティンゲン携帯暦では誤まって貴下の所管とされております(4)けれど——のですが、それでも私は貴下が良き調べ、「礼儀作法」を尊重なさることを存じております。それゆえ、有り合わせの備忘録か何



かにお書き留めのほどを。語りの調トーンべが、事の性質と聴き手の耳、すなわち、大人も子どもも入り込みこみの一座に相應しくなるよう、某それがしあい努め申し候そつう、と。こうすることで、畏敬するルンケル殿、貴下の御意に叶こつたなら幸いですし、しからずんば遺憾の至り。そのうちに貴下がこの語り手を、お国振りの旋律メロディに通奏低音としかるべき器楽伴奏を付けている作曲家だ、と看做してくださるようになれば——願わくはそうあって戴きたいのですが——それでもう万事めでたし、めでたし。

ちなみにこれらの昔話メルヘンはいずれも創作あるいは外国種ではなく、管見の及ぶ限りでは、一つ残らず地場の産物です。これらは代代、父祖から孫子へと口伝えで受け継がれて来たのです。本質的には何も変更されていません。鑄潰されてはおりませんし、かつてフランス金貨のルイ十五世(38)の肖像がそのご先祖方の鬘かぶを被つたり、鼻を付けたりして登場したように、打刻し直されてもおりません。ただし著者はあえて、物語で漠然としている場合、舞台となる地方を定めたり、内容に相応しいと思われる時代・場所に移したりはいたしました。本来の姿総体に手を加えるのは憚られました。とは申せ、著者の隣人たるかの彫刻家(39)が鎚たかねや鑿たかねを巧みに振るって、鈍重な大理石の塊から、ある時は神を、ある時は半神あるいは精霊を出現させるのに成功、以前はどこにでもある壁用石材に過ぎなかったのに、それが今や工房で光り輝いているように、著者もこうした原材料の加工をうまくやってのけられましたかどうか。このご裁断は、畏敬するルンケル殿、ひとえに貴下にお任せいたします。

一七八二年みなづき薔薇月しるに誌す

原注

(一) ダニエル・ホドヴィエツキイのお蔭に他なりません……読者がこの点に興味をお持ちなら、ゲッティンゲン携帯曆 Göttingischer

Taschenkalenderの一七八二年四月の十二箇月銅版画を参照することをお勧めする。

(2) 石版作りのビュルガー君 公の告知によれば、『千一夜物語』の改造計画は次のような標語の下。「神よ、恩寵もて助けたまえかし。ここに石版を掲ぎてよえ」Help Gott mit Gaden / He wird och Seepe gesaden.<sup>(35)</sup>

(3) 広告する……かかる題目の下においてある。『民語』——様様な言語から訳されたる』ベルリン。Volksmärchen, aus verschiedenen Sprachen übersetzt. Berlin.

(4) ゲッティンゲン携帯暦では誤まって貴下の所管とされております……(これまで再再挙げた暦を参照されたい)。

### 訳注

(1) 聖ゼーバルト教会 die St. Sebaldskirche. 聖ゼーバルトという聖人は聖人事典に記載されている。宗教伝説によれば、ニエルンベルクの有名な守護聖人で、北方、おそらくテンマークからレーゲニッツ河とベークニッツ河の間の地方に來た、とのこと。詳細は不明。生涯は闇に包まれ、その事跡報告は存在しない。生誕地もいつ生きていたかも分からない。十一世紀に前述の土地に到來した、との若干の典拠があるのみ。

(2) 聖物保管係 Küster. 教会堂の管理人。建物の鍵類と聖物(聖体拝領やミサに用いる聖具など)の保管に当たる。かつては教区の児童に初歩的教育を与える師匠役を務めたこともあるが、おおむねその地位は低下、この当時は鐘搦きなど教会の雑役を処理する寺男程度だった、と考えてよからう。ムゼーウスは「宝物探し」で「帝王と寺男」Kaiser und Küsterの)とく同じ頭字を持ち、脚韻を踏んだ対語で、音が似ているが雲泥の差がある二つの身分の一方に、寺男を用いている。

(3) タニエル・ホドヴィエツキイ Daniel Chodowický. 著名な画家にして銅版画家タニエル・ニコラウス・ホドヴィエツキイ Daniel Nikolaus Chodowický (一七二六—一八〇一)。十八世紀後半の市民芸術における押しも押されもしない代表者。一七九七年ベルリンの造形美術高等専門学校校長。ゲッティンゲンの『一七八二年の便宜と楽しみのための携帯手控え』Taschenbuch zum Nutzen und Vergnügen für Jahr 1782に、銅版画十二箇月の第二連作「結婚申込み」を発表した。四月の銅版画にはある聖物保管係の結婚申込みの情景が描かれている。これらの銅版画には自然科学者にして諷刺作家のゲオルク・クリストフ・リヒテンベルク Georg Christoph Christoph Lichtenberg (一七四二—一九九)の詞書きが添えられていた。ただし、ダーフィット・レンケル殿なる命名はムゼーウス自身によるもの。

(4) (容貌)「フェジオグノミー」(容貌、人相、表情) Physiognomie は、頭蓋の形状、つまり骨相を含め、それから人間の能力・性格が読み取れる、として、当時から十九世紀に掛けて、ヨーロッパの知識人の大きな関心の対象だった。人相を基に人間の能力・性格を考究する学問を「顔相学」Physiognomik、骨相を基にする学問を「骨相学」Phrenologieとす。ムゼーウスの同時代人で、ムゼーウスが個人的に高く評

働していたスイスの神学者ヨーハン・カスパー・ラヴァーター（一七四一—一七八八）には親相学の大著がある。ムゼーウスは『親相学的旅行、まずは親相学的日記』*Physiognomische Reisen, vorm ein physiognomisches Tagbuch*（四分冊。一七七八—一七九二）を匿名で著し、ラヴァーターの方法と希望に対し、熾烈な闘いを挑んでいる。『ドイツ人の民話』でもそこに親相学などラヴァーターが信奉することにあてこずりがある。ここでもいささか彼をおちよくっているようだ。『リユーベツァールの物語』ドイツ人の民話』解説、「ローラントの従士たち」訳注「親相学に對する諸断章」参照。

(5) 精神活動 *opertione mentis*。ラテン語。昔の心理学者の慣用によれば、思考・判断・意志という理性の三つの爲。

(6) 次中音 男声の最高音。

(7) この最近十年というものが……げに厭わしき感傷愛好癖が蔓延。ゲーテの『若きヴェルターの悩み』*Die Leiden des jungen Werthers*（一七七四）の驥尾に附してドイツ文学に氾濫した無慮無数の感傷的長編小説を示唆している。既にこれより十年前に最初の長編小説『二代目グランディオン』あるいは書簡体に仕立てた某氏の物語』*Grandsion der Zweite, oder Geschichte des Herrn N.\*\*\* in Briefen entworfen*（三分冊。一七六〇—一六二）で、英国人の感傷的書簡体長編小説に熱狂する風潮を激しく攻撃したムゼーウスのこと、いわゆる「ヴェルター熱」を冷やかさずにはいられなかったことは明白。ただし、ムゼーウスがこのように記す前に、ゲーテ自身も『感傷の勝利』*Der Triumph der Empfindsamkeit*（執筆一七七七—七八）において『ヴェルター』の追隨者をからかっている。

(8) 南の熱風が……宿営地に投げ落とした。旧約聖書出エジプト記十六章十三節には、エリムとシナイの間のシンの曠野でイスラエルの民が宿営、食食物に窮し、モーセとアロンに不平を訴えた時、夕方になると鴉が飛んで来て、宿営地を覆った、とあるが、「熱風による」とも、「葦の海から」とも記されてはいない。「葦の海」うんぬんは同じ出エジプト記でもこの前の十三章、十四章にある。旧約聖書民数紀略十一章三十一—三十二節には、主の許から風が出て、海の方から鴉を吹き寄せ、イスラエルの民の宿営地に落とした、とある。

(9) 緩徐曲 *緩やかな曲*。

(10) 魔法の角灯 *「幻灯機」 die Zauberlatern*。初期のスライド式幻灯機。イエズス会士にして学者であるテューリンゲン生まれのドイツ人アタナシウス・キルヒャー *Athanasius Kircher*（一六〇一—一八〇〇）によって発明されたラテルナ・マジカ *Laterna magica* に始まる。ガラス板に描かれた壮麗な建造物や雄大な風景、珍奇な鳥獣の姿やらを、これを用いて壁に映し出す真つ暗な小屋の中での見世物は、十八世紀から十九世紀にかけて西欧の子どもたちに人気があった。

(11) かの有益なシュレックから *dem instruktiven Schrockh*。新教徒の教会歴史家ヨーハン・マティアス・シュレック *Johann Mathias Schrockh*（一七三三—一八〇四）は、児童文学作家クリスティアン・フェーリクス・ヴァイセ *Christian Felix Weisse*（一七二六—一八〇三）に誘われて『子どもたちのための一般世界史』*Allgemeine Weltgeschichte für Kinder*（一七七九／八四）を著した。

- (12) 差し向かい *tête à tête*. フランス語。顔と顔。二人きり。
- (13) カルロ・ゴッツィ氏の *die Volksmärchen des Herrn Carl Gozzi*. ヴェネツィアの喜劇作家ゴッツィ伯爵カルロ Carlo. Conte Gozzi (一七二〇—一八〇六) は、同じくヴェネツィア人のカルロ・ゴルドーニ Carlo Goldoni (一七〇七—一七九三) が確立した近代的性格喜劇に對し、伝統ある即興喜劇の擁護者だったが、こうした抗争に際し、十のお伽話劇を書いた。その中には「鹿の王」*Le cervo* や「トゥーランドット」*Turandot* がある。これらはドイツやフランスのロマン派文学に多大な影響を及ぼした。ヴィーランドとも親交のあった著述家フリードリヒ・アウグスト・クレメンス・ヴェルテス *Friedrich August Clemens Werthes* (一七四八—一八一七) のドイツ語初訳は一七七七年出版。全五巻。
- (14) 本書見返しの寓意的な裝飾画。最初の二つの版の見返しにあった。後の諸版では載っていない。散歩している二人の子どもがどこかの宮殿の前にいる情景が描かれていた。
- (15) 精 *Genius*. 古代ローマの民間信仰によれば、ローマ人男性が一人一人持っている守護精霊。「リプッサ」では複数形 *Genien* が出る。
- (16) 美女 *Nymphen*. 「ニンフ」はギリシア神話に登場する、森や河、泉、山や洞窟、海などに棲む女性の精霊。単に美女を指す言葉としている事例は「屈背のウルリヒ」にも出る。
- (17) クロップシュトック *Klopstock*. フリードリヒ・ゴットリープ・クロップシュトック *Friedrich Gottlieb Klopstock* (一七二四—一八〇三) は、その宗教的敘事詩『救世主』*Der Messias* (一七四八—一七五三) の著者としてゲーテをも凌ぐドイツ最大の詩人とされたが、論文「ドイツ語正書法について」*Über die deutsche Rechtschreibung* (一七七八) を発表、正書法改革に関する所見をドイツに広めようと試みたところ、失敗に終わった。
- (18) 学識高きフォス学校長 *der gelehrte Rektor*. Vol. 文人にして文献学者ヨハン・ハインリヒ・フォス *Johann Heinrich Voss* (一七五一—一八二六)。一七七二年からゲッティンゲン大学で神学、次いで文献学を学ぶ。一七七二年同大学で結成された文学結社「林苑」(後の「ゲッティンゲン林苑同盟」) に加盟、その推進者の一人となる。結社は、後に多くの「詩神年鑑」の大本となったゲッティンゲン「詩神年鑑」に拠って活動したが、これはフォスが一七七五年以降出版したもの。一七七八—八二年、ハノーファー選帝侯国の小さい町オッテルンドルフ、次いでオルデンブルク公国の都市オイティンで学校長となる。「オデュッセイア」(一七八一)、「イリアス」(一七九三) の翻訳で名高い。ハイデルベルク大学の教授ともなった。その後半生は専らウェルギリウス、テオクリトス、アリストファネスなどの翻訳に従事。一七八一—八五年六巻から成る『千一夜——アラビアの物語』*Die tausend und eine Nacht. Arabische Erzählungen* をブレーメンで出版。これは「千一夜物語」をヨーロッパに初めて翻訳・紹介したアントアニス・ガラン (一六四六—一七一五) の『千一夜——ガラン氏によりフランス

語に移されたるアラビアの物語』*Les mille et une nuits: Contes Arabes, traduits en Français par M. Galland* (一七〇四—一七。全十二巻)のドイツ語訳である。ドイツ語訳としては二度目。フォスのこの訳業は意外なことながらドイツ語圏でもこれまで余り知られていなかったようである。エルンスト・ベーター・ヴィーケンベルク著『ヨーハン・ハインリヒ・フォスと「十二夜」』*Ernst Peter Wieckenberg: Johann Heinrich Voß und Tausend und eine Nacht*と「最近の研究(二〇〇二)」があるが、「愛神となった精霊」解題参照。

- (19) こった煮料理「たまぜ」*Olla podrida*。ムゼーウスは「オーリヤ・ポドリーダ」*Olla podrida*と綴っているが、綴りも発音も改めた。「オーリヤ・ポドリーダ」はイスパニア、特にカステイリア地方の典型的な煮込み料理。民間語源学では「腐った(「ポドリール」*podrir*＝腐る)煮込み」だが、本当は中世イスパニアの言葉で「強い *podrida* (瘦い、しつこい) 煮込み」から。豚、牛、羊、兎などさまざまの肉類——家禽類、ハム、ベーコンなども——と豆類、玉葱などの野菜、大蒜・胡椒などの香味野菜・香辛料を、少量の水で数時間に亘り、蓋をきっちり閉めた鍋で煮込んだもの。庶民はもとより王侯貴族にも好まれた。十六世紀以降ヨーロッパ各地に広まり、ドイツ語圏では「イスパニア風スープ」とも言われた。一五八一年出版のドイツ語の料理書であるマックス・ルンポルト著『新料理書』*Max Rumpolt: Ein new Kochbuch*には「ホラポドリーダ」*Hollapodrida*の調理法が出ている。また、十八世紀のヨーハン・ゲオルク・クリュニッツ編『経済百科事典』*Johann Georg Krünitz: Oeconomische Encyclopädie*には「オーリヤ・ポドリーダ」*Olla podrida*の項目がある、とのこと。イスパニアの安旅籠屋などでは、猫肉入り(原型を留めないからこまかし易い)のオーリヤ・ポドリーダを、兎肉入りと称して旅に不慣れた客に供したりしたらしい。

- (20) 石鹸作りのビュルガー君 *Freund Bürger der Seifensieder*。譚詩「レノーレ」*Lenore* (一七七四)で有名な詩人ゴットフリート・アウグスト・ビュルガー *Gotfried August Bürger* (一七四八—一九四)は、「ゲッティンゲン学術文芸雑誌」*Das Göttingische Magazin der Wissenschaft und Literatur* (第二巻第二号三〇〇ページ以降)で、「十二夜物語」の翻訳計画を告知したが、これは実現しなかった。

- (21) エサムト志サパソレニテ充分ナリ *et voluisse sat est*。ラテン語。完全な形では *Et magis et voluisse sat est*。「大イナル事業ハ成サムト志サパソレニテ充分ナリ」。ローマの詩人セクストゥス・プロペルティウス(紀元前四九頃—一五)『悲歌』二・十六「よし力及はずとも、高きを掴まんとするは、榮えある行い。大いなることは心と眼にて成さんと志さばそれにて充分なり」による諺的慣用句。

- (22) ヴィーラントの『オーペロン』*der Wielandische Oberon*。ムゼーウスが不惑に近くなった一七七二年、かねてから彼が出入りしていたザクセン＝ヴァイマル公国の宮廷に、公妃アンナ・アマリアによってクリストフ・マルティン・ヴィーラント *Christoph Martin Wieland* (一七三三—一八一三)が公子傳育官として招聘された。親しい友人となったヴィーラントはムゼーウスに昔話や中世の伝説、バジールの『五日物語』、さては東洋の奇譚などの魅力を教えた、と思われる。一七八〇年彼は二部から成る有名な昔話叙事詩『オーペロン』を出版した。これは、お伽話風に姿を変えられた東洋における若き騎士の冒険を主題とした中世フランスの韻文物語『ユオン・ド・ボルドー』の翻案。「リブツサ」

訳注「ヒュオン」参照。

- (23) 一大陸の気高き女性君主 ロシアの女帝エカチエリーナ二世（在位一七六二—一七九六）は孫たちのために一連のメルヒェンを書いた。これらは一七八二年以降、ベルリンの出版者で著述家でもある啓蒙主義者クリストフ・フリードリヒ・ニコライ・Christoph Friedrich Nikolai（一七三三—一八一二）によって出版された。こゝでも啓蒙主義とメルヒェンの意外な結び付きが見られようか。
- (24) ニュルンベルク Nürnberg 中部フランケン<sup>ミッテルフランケン</sup>の由緒ある美しい都市。現在バイエルン州。この当時は神聖ローマ帝国直属都市。今も昔もドイツ有数の商工業都市。
- (25) ラスベ Raspe. 未詳。十八世紀巷間に伝えられていたミュンヒハウゼン男爵の法螺話を、ビュルガー（一七八六）に先んじて、英国において英語で物語に編んだ（一七八五）著述家ルードルフ・エーリヒ・ラスベ Rudolf Erich Raspe（一七三七—一七九四）と関係あるか。
- (26) オーノア夫人 Madame d'Aulnoy. オーノア伯爵夫人マリ・カトリヌ・ド・ジュメル・ド・バルヌヴィユ・ド・ラ・モット Comtesse d'Aulnoy. Marie Catherine Le Jumel de Barneville de la Motte（一六五〇—一七〇五）は、回想録や長編小説の他に妖精が狂言回しの役を務める物語の数を著した。最も重要なのは一六九八年から出版された物語集『新小説あるいは当世風妖精たち（別名『名高き妖精たち』）』（一六巻）*Contes nouvelles, ou les fées à la mode (Les illustres fées)* である。これは十八世紀までもずっと続くお伽話の一大潮流の源となった。こうしたフランス妖精お伽話<sup>フレンチフェアリー</sup> Contes des fées の最初の集成は『妖精文庫』*Le cabinet des fées* なる題名で九巻本としてネーデルラント共和国（現ネーデルラント王国）オランダ王国の首都アムステルダムで刊行された。うちオーノア夫人のお伽話が三巻を占める。ニュルンベルクの出版業者ラスベは一七六一—一六六年同様に九巻の『妖精文庫』*Kabinet der Feen* を新たに出版した。
- (27) 手作り *bearbeiten*. ムゼーウスは *bearbeiten* を「耕す」と「手を加える」「改作する」の両義に用いている。
- (28) 復活祭市 *Ostermesse*. 「オスターマルクト」*Ostermarkt* と同じ。復活祭（春分後の最初の満月のあとの日曜日）に近郷の中心となる都市あるいは町で開かれた歳の市。近郷の人人が遊楽半分で買い物に訪れた。しかしながら、日本なら春分の日（三月二十一日頃）、英国なら三月二十五日（四季支払日の一つ）とほぼ重なり、一年の分岐点。この頃に雑誌あるいは新聞に広告が出された、と言っている程度であろう。ただし、新刊書籍は実際この時期やミカエル祭の時期に発売されたようだ。
- (29) 秋の市 *Herbstmesse*. 秋に開かれる歳の市あるいは家畜市。しかしながら、日本なら秋分の日（九月二十三日前頃）とほぼ重なる、英国なら四季支払日の一つである九月二十九日、すなわち大天使ミカエルの祭日「ミケルマス」*Michaelmas* を指しているのかも知れない。後者はドイツではミヒャエリスメッセ *Michaelismesse*、あるいはツビヤエルメッセ *Michaelmesse* である。これはフリードリヒ・ヤーコプスの書いた『ドイツ人の民話』の「一八二五年版のための序文」*Friedrich Jacobs' Vorrede zur Ausgabe vom Jahr 1825* に「一年の区分の一つとして出て来る。」



- (30) 庇護者 Patron. ラテン語では「パトロヌス」Patronus。元来は古代ローマで解放奴隷の旧主人、あるいは被保護者を持つ貴族を指す。
- (31) 被保護者 Klient. ラテン語では「クリエンス」clients。元来は古代ローマで貴族に従属し、その保護下にあった平民を指す。
- (32) ベルリン Berlin. 現在ドイツ連邦共和国の首都として三百五十万近い住民を擁するこのドイツ最大の都市、かつてのプロイセン王国の、ドイツ帝国の、そしてヴァイマル共和国の、次いでヒトラーの第三帝国の首都だったベルリンは、一七八二年にはまだブランデンブルク選帝侯国の首邑だった。国家としてのプロイセンがヨーロッパの列強の一つに興隆するのは、大選帝侯と諡名されたフリードリヒ・ヴィルヘルム一世（一六四〇―一八八）によつてだが、彼の本領はまだプロイセンではなく、ブランデンブルクだったのである。とは言え、元来ドイツの圏外にあつて、やがて一七〇一年以降プロイセン王国として自立する東プロイセン（後の名称）地域とブランデンブルクをフリードリヒ・ヴィルヘルムは既に統一国家として結び付けようとしていた。けれども初めてプロイセン国王 König von Preußen と名乗つたのは、彼の息子フリードリヒ一世（大）王。一七四〇―一八六）以降。
- (33) 世界を純化している veredelnsien die Welt. ムゼーウスはこの表現で、後代スイスの口承文芸研究者マックス・リュティ（一九〇九―九一）が『ヨーロッパの昔話 その形式と本質』（一九四七）Max Lüthi: *Das europäische Volksmärchen. Form und Wesen*（小澤俊夫訳あり。岩崎美術社、民俗民芸双書、一九六九）で唱えた「民話の諸特性のうちの抽象性、昇華性を既に示唆しているのかも知れない」。
- (34) お定まりの原文 konventuell. konventionell の誤りと考えて訳した。
- (35) 神統譜 Theogonie. 原文では Theogonie となつている。誤り。神の誕生・起源を説いたもの。最も有名なのは、伝説のホメロスに次いで最古のギリシアの叙事詩人ヘシオドス（紀元前八世紀頃在世）著す『神統譜』。
- (36) 『鴛鴦おばさんのお伽話』 Marchen meiner Mutter Gans. フランス語『ロント・ド・マ・メール・ルア』Contes de ma mère l'Oye(=Poule) のドイツ語訳。フランスの官吏・学者・文人シャルル・ペロー（一六二八―一七〇三）作とされる『過ぎし昔の物語あるいはお伽話、ならびに教訓』（一六九七）Les Histoires ou Contes du temps passé. Avec Moralitez(=Moralités) のまたの名。同書初版（散文八編）には「版画家クルズイエの署名のある、糸を紡ぎながら昔話を語る老婆と、一心に聞き入る三人の子どもを描いた口絵があり、老婆のうしろの扉に、『がちようおばさんの話』と書いた札がかかっている」（『新倉朗子訳『完訳ペロー童話集』（岩波文庫、一九八二）解説に拠る）。つまり「鴛鴦おばさん」はこの「農婦の身なり」（『前掲書』の老婆なのである。もつとも、なぜそう名付けられたのかは分からない。英国にも『マザー・グース』Mother Goose（英国の民間に伝承された童唱集成）があるが。
- (37) 管式風琴の調べ。リヒテンベルクは聖物保管係求婚の図に添えた詞書き（『前掲訳注参照』）でこう記している。「聖物保管係はここに描かれてある教会の一員ではあるが、（ここには）書かれてはいない教会の構成から申さば、必要欠くべからざる人間ではない。彼は管式風琴に訴えて聖なる前奏曲で己が愛を綿綿と語らせよう、というご様子。だつて、こうして自分の地上の天使にべつたりくつついている彼が、天界の天使



たちの詠唱に耳を傾けているなんて、わたしは思わないもの」と。

(38) ルイ十五世 Ludwig der XV. 一七一〇—一七四年。フランス国王（在位一七一五—一七四四）。ルイ十四世の曾孫。失政続きの上、私生活でも奢侈を極め、国民に重税を課したにも関わらず、その治世下で国債は四十億リーブル（フラン）にも達した。ルイ十六世（在位一七七四—一七九三）、ルイ十八世（在位一八一四—一八二四）、シャルル十世（在位一八二四—一八三〇）の祖父。

(39) 著者の隣人たるかの彫刻家 だれを指しているのか未詳。しかし、ムゼーウスの友人クリストフ・マルティン・ヴィーラントは、さまざまな素材を換骨奪胎して諷刺や小説に仕上げ、華やかな文筆活動をしていたから、このような彫刻家に譬えられたのはヴィーラントだ、と考えるのが妥当であろう。

(40) 「神よ、恩寵もて助けたまえかし。ここに石鹼を拵えまするゆえ」*Heilp Gott mit Gnaden / He wird och Seepe gssaden* 低地ドイツ語で書かれたこの標語は結局のところこんなことか。「石鹼を作る」は、異なる材料を混ぜ合わせ、煮て溶かし、型に注ぎ、冷やして成型、それから切り分ける、といった工程。ビュルガーの翻訳はこれに譬え得る独自の編集方針に基づくはずだった。

## 解題

一七八二—一八六年、五分冊で出版され、文人ムゼーウスの名を今に伝える作品『ドイツ人の民話』*Volksmärchen der Deutschen* 全十四話の第一分冊（「三姉妹年代記」*Die Bücher der Chronika der drei Schwestern* 「リヒルデ」*Richilde* 「ローラントの従士たち」*Rolands Knappen* を収録）の巻頭を飾った長文の緒言である。

ヴォルテールに心酔した啓蒙主義者、合理主義哲学の忠実な信奉者で、多年ヴァイマル古典語中高等学校教授の職責を全うし、一般には、社会的地位はあるものの、しかつめらしい御仁だ、と受け取られかねないようなムゼーウスが、なぜ昔話を再話したか、つまり、なぜ昔話を素材として文芸作品に仕立て上げたか、を具体的に解明する恰好の資料である。

また随所に発揮される軽妙な諧謔、<sup>フモール</sup>ともすれば無くともがなと微笑まれる鋭い諷刺が、無邪気な善意に満ち、円

満な家庭人だった、とされる彼が紡ぎだした昔話メルヘンと、矛盾無く両立する所以ゆえんもこの文から類推できよう。すなわち、ムゼーウスは口承文芸がおもしろくて堪らなかつた。そしてそれを自分の言葉でも語りたかつた。しかしながら、そうした楽しい仕事に従事しつつも、面映おもはゆかつた。照れ臭かつた。真面目に、素直に、ひたむきに、またしめやかに、目くるめくばかりの幻想の世界を描ききるには、どうにも学殖が邪魔をしたというわけ。

しかし、それも今日の感覚からすれば瑕疵かしではなからう。詳しい注を附してムゼーウス在世時のドイツを復元し、その中に嵌め込んで読み直せば、彼の物語の数数は、シャルル・ペローの『過ぎし昔の物語あるいはお伽話、ならびに教訓』(二六九七)とヤーコプとヴィルヘルムのグリム兄弟の『家庭と子どものための昔話集』(一八一二／一五初版。一八五七決定版)を結び付ける重要な一環、との従来からの評価に加え、近世ドイツ文学の秀作として刮目かつもくして見るべきではあるまいか。事実ムゼーウスの友人ヴィーラントはこれらを、十八世紀最後の四半期が産み出した最上の作品に入る(フリードリヒ・ヤーコプス「一八二五年版のための序文」)と讃えている。

終わりに一言。セクストゥス・プロペルティウスのラテン語ラテン語で、ホドヴィエツキーの発音表記、ビュルガーのドイツ語が低地のそれであることにつき、人文学部ヨーロッパ比較文化学科の同僚西村淳子教授、阿部賢一専任講師、新田春夫教授の懇切なご教示を戴いた。西村さん、阿部さん、新田さん、どうもありがとうございます。

一八二五年版のための序文<sup>(1)</sup>フリードリヒ・ヤーコプス<sup>(2)</sup>著

ドイツ民族は、その最も優れた著作であつても数十年ほど昔のものになると、軽薄な若者が歳を食い始めた恋人にすぎなくなるのと大差無い扱いしかなくなり、法外な好奇心を燃やして新たな、いや、今出たてのほやほやの作品を追い求める、となどしばしば後ろ指を差されますし、それも故なしとはなし得ません。その結果書籍の寿命は基督月「十二月」の昼の長さと同様どんどん短くなり、とどのつまりは、文学の二つの南中点<sup>(3)</sup>であるミカエル祭<sup>(4)</sup>と復活祭<sup>(5)</sup>の間の僅か数週間ほどになってしまいます。ちなみに、このような新しい物好きには明暗両面があります。良い点は、著作家や流行<sup>(6)</sup>り物商人の活動を絶えず張り詰めた状態にしておくので、この民族——おそらく遠からずして男女全員著作作家になることでしょう——の教養を到底信じられないまでに助長するに違いないこと。そう、なにしろキケロ<sup>(6)</sup>やクウインティアヌス<sup>(7)</sup>によれば、物を書くのは、読んだり聴いたりよりもずっと多量の修養を、それもずっと早く齋<sup>(8)</sup>してくるからです。悪い点はと申しますと、この大いに尊敬に値する、多くの点で全く優れている民族が、一心に努力しているにも関わらず、飽くこと無き貪欲のために徹底的な教養を身に付けられない、そして少なくともしつかりした美的感覚を養うまでに至れないということ。短い干潮の間に流砂に基礎を置か、あるいは急いでそこに何か建てるやいなや、そいつは次の市<sup>(9)</sup>の満潮に洗い流されてしまうのです。その結果周到に物事を

思い巡らす読者、昂揚した読者方であればあるほど、気分も記憶も素漠荒涼たるままのありさま。ホメロス風の形容句を用いれば、絶えず揺れ動き、そしてそれだからこそ、実を結ぶことのない海原のごとくに。かような貪欲から生ずるいろいろ別の弊害を挙げて行けば、まるまる一冊の本の材料にもなりません。さて、私は序文のみを、それもこれは自分からしやしやり出たのですらくなく、友である版元の要請によって書くことになったのですから、このもう既にあまりにも長たらくしてしまつた付けたりの見を、読書界は段段に悟つて来て、上述の欠点から脱却しようとなつて始めたように思われる、という心慰めで結ぶとしましょう。こう推測するのは、次の二つの現象からです。

一つには、出版書肆が、堪つたもんじやない、と感じている現象——要するに、六箇月間に出した新刊書がその源泉すなわち版元へますます激しく逆流して行くということ——から。二つには、これは慶賀すべき現象ですが、暫く前からかなり昔の著作家の新版が熱心に求められ購入されていることから。これは、かかる作品も読者に巡り会うようになりつつあり、我がドイツの読書界という混沌の巷——ここにはどの世代もが伏し拝む偶像を持つており、しかもその偶像は前の世代にも次の世代にもまるきり知られず、問題にもされないのです——にも、やつとのことです。その偶養人がお互いを理解し合い、再認識し合うための共通の中心点と祭壇ができてきているのでは、との希望を繋ぐ、すがです。ウエスタの火の許でのこうした自発的な邂逅、もろともに行う礼拝は、思いも掛けぬほど多くのものを提供します。私たちが既に長年徒に模索し続けているのに、ドイツ風の民族衣装によつても、体操術や学生組合によつても獲得することができなかった、あの国民性への道をこれのみで拓き得るのです。

これぞまさしく昔日の、そして健全な食餌に対する要望が目覚めた結果ですが、ここに版元が江湖の皆様へ新版で差し上げますのは、洗礼證書によれば一七八二年生誕、その容姿・偶養に關しましては古風とは申せ、若さと優雅さは溢れんばかり。これらの昔話——その作者の全ての著述の中で、『観相学的旅行』を別にすれば、おそらく最も豊

かな独自性を示しております——の題材は、我が民族固有の生活に根差しており、この上もなく素晴らしい、不朽の命を持っています。常に明朗かつ活発な、機知と茶目っ気が横溢している独特の語り口によっても、飛び切り優れたネーデルランドの色彩派画家たちの作品を想い起こさせる鮮明な色調を授かりました。一八〇三年、作者の没後第二版出版の労を執り、あちこちを訂正<sup>(14)</sup>、注を施したヴィーラント<sup>(15)</sup>が、次のように言っているのもむべなるかな。いわく。これらの物語は十八世紀最後の四半期が産み出した最上の作品に入る、と。またいわく。若い人たちが読んで頭と心に得るところがある著作のうちで、その至当の位置を失うことは決して無いだろう、と。そして最後にいわく。度重なる模倣によっても、その長所の数数がより明るい照明を当てられたに過ぎなかった、と。現代に生きる読者層にもしかして不都合と思われるかも知れない唯一のことは、今はもう忘れられた文書、さまざまの、主として文学界のできごとへの数限り無い言及です。これら諸事項は、ムゼーウスが書いた当時こそ広く世に知られていたのですが、上述の出版人「ヴィーラント」にすら既に一部は分からなくなってしまったのでした。そして、二十二年も経った当今となりますと、大部分の読者の皆様——皆様の多岐に亘る精神力の中でも記憶力というのはそもそも最強ではありませんので——には、とんと不案内かつ理解不能に違いありません。ヨーロッパの司書と呼ばれるのが大いに好きな我らドイツ人が、フランス人や英国人のように国文学史に注意を払っているなら、とつくの昔にだけかしら注釈者——諷刺作家にして諧謔家であればいずれも早晚そういう人物が必要になります——がそうした需要に応じていたでしょうに。しかし三文文士どもやそのたわけた所業<sup>(16)</sup>がどれほど問題だったんだね、とおっしゃる向きがあるかも。もとよりどうってことはありません。でも、良い着想の維持と意義は我らにとつて大切なことではないでしょうか。なにせ、こうした果実は鼻であしらってよいほど再再アルプスとバルト海<sup>オストゼー</sup>の間「ドイツ語圏」に熟すわけではありませんから。

さて、私どもは、これから先たくさんの版が出ることを期待しつつ、これらの昔話メルヘンのそうした未来の出版者のどなたかにそうした仕事①——私どもはこれを要求されませんでした。なにせそもそも本文も原注もヴィーラントが出版した形そのままです——をしてくださるようご推奨いたす次第ですが、この序文を結ぶに当たり、この愉快な本の復活が、これほど聡明な作家はごく少数であり、同時に、この上なく純粹な心情と人間性に関する深遠な知識との、それから、この上なく無邪気な善良さと極めて豊潤な機知との世にも稀なる結び付きによって人間として最大の尊敬をかちえ、彼と馴染みになった全ての人人に、好意に満ち満ちた思い出を起こさせる一男性への追憶を新たにすることに寄与したことへの喜びを表明さざるを得ません。

ゴータ⑱にて 一八二五年ユリウス月〔七月〕

F・J・

訳注

- (1) 一八二五年版のための序文 Vorrede zur Ausgabe vom Jahr 1825。次に訳・注を載せた「新版（一八三九―四〇年版）のための序文」に先立って、『ドイツ人の民話』一八三九―四〇年版の巻頭に掲げられている。一八二五年版は第三版、一八三九―四〇年版は第四版に当たるか。
- (2) フリードリヒ・ヤコプス Friedrich Jacobs。ドイツの古典文献学者にして著述家クリスティアン・フリードリヒ・ヴィルヘルム・ヤコプス Christian Friedrich Wilhelm Jacobs（一七六四―一八四七）。詳しく記すと、一七六四年十月六日ゴータに生まれ、一八四七年三月三十日ゴータに死す。しかしヤコプス自身が、『ドイツ人の民話』（一七八二―八六）出版と誕生年を同じくしている、つまり、「人気のあるこの本は同じ年（一八三五年）に序文執筆者とともに五十歳の記念日を祝ったのです」と「新版のための序文」に記している。これは甚だ奇妙。イエナ大学とゲッティンゲン大学で文献学と神学を学び、一七八五年故郷ゴータの古典語キムナ中高等ナジウ学校教授となる。一八〇二年以降これに加え同市の

公立図書館の職を受諾。一八〇七年バイエルン王国の首都ミュンヘンへ赴き、同市の大学予備門で古典文学教師となり、同時に王太子ルートヴィヒの家庭教師として働く。しかし新教のザクセン・ゴータ公国出身の教師はカトリック圏のバイエルンでは敵意に曝されることがあり、とりわけこれが原因で、新たに創設されたベルリン大学への招聘を断わった後、一八一〇年ゴータに帰る。ここで彼は亡くなるまで図書館上司書兼貨幣(古銭・メダル)陳列室長として職務にいそしんだ。文献学者としても、古典の校訂者としても多数の業績がある。

(3) 南中 天体が天頂の南側で子午線を通過すること。その時天体の高度は最も高くなる。

(4) ミカエル祭 Michaelismesse. 大天使ミカエルの祭日。九月二十九日。ほぼ日本の秋分の日に重なる。「ムゼーウス緒言」訳注「秋の市」参照。ミヒャエルメッセ Michaelmesse とも。『グリムドイツ語辞典』に「去年のミヒャエルメッセこのかた不朽の存在となった全ての著作家たちの中で」(ラーベナー Rabener)との用例がある。なお、十七世紀まで遡るライプツィヒ書籍市 die Leipziger Buchmesse と関係あるか。現在これは五月に開催されるが。

(5) 復活祭市 Ostermesse. ほぼ日本の春分の日に重なる。「ムゼーウス緒言」訳注参照。

(6) キケロ Cicero. マルクス・トゥリウス・キケロ(紀元前一〇六―四三)。古代ローマの政治家、雄弁家。

(7) クウインティリアヌス Quintilian. マルクス・ファビウス・クウインティリアヌス(三五頃―九五)。古代ローマの雄弁家。

(8) ホメロス風の形容句を用いれば、絶えず揺れ動き…:海原 古代ギリシアの英雄叙事詩「イーリアス」と「オデュッセイア」は伝説の詩人ホメロスが作ったとされたが、それはともかく、これら長大な叙事詩に出る神神から物品に至るまで、決まった形容詞、形容句が付けられる。海それは「葡萄酒の」「灰色の」「絶えず揺れ動く」である。

(9) ウェスタの火の許で 古代ローマ人が尊崇した公私の竈の女神であるヘステリアに捧げられた聖なる火は、ローマの安寧のいわば象徴だった。これを護る六人の処女の巫女たちを「ウェスタール」という。

(10) 体操術 Turnkunst. 体操 Turnen. 肉体的力と精神の力の調和を図るための体操は古代ギリシア以来の伝統を持つが、特にドイツにおいては「体操の父」と呼ばれたフリードリヒ・ルートヴィヒ・ヤーン Friedrich Ludwig Jahn(一七七八―一八五二)によって唱導された。ヤーンはハレ、イエナ、グライフスヴァルトの各大学で神学を学び、言語学の研究を行ったが、ヘプナー Hüpfer と同じ仮名で『プロイセン王国における愛国主義の振興について。全プロイセン人に捧げる』Über die Beförderung des Patriotismus im preussischen Reich. Allen Preussen gewidmet.(一八〇〇)を著し、イエナの会戦(一八〇六。プロイセン軍がフランス軍に大敗)後プロイセン軍に従軍。ナポレオン率いるフランス軍の侵攻に抵抗しつつ、各地で敵軍に対する憎悪を鼓吹し、国民教育と民族主義に基づく軍隊制度・国家制度の確立を説いた。一八一一年彼が体操と名付けた技術のために最初の体操場を開く。これはナポレオンのプロイセン制圧によって精神的に疲弊・頹廢したプロイセンの青年たちの教育に貢献しようとしたもの。一八一三年リュットウ男爵ルートヴィヒ・アドルフ・ヴィルヘルム Ludwig Adolf Wilhelm, Freiherr



von Litzkow (一七八二—一八三四) が創設した義勇軍(フランクシュツツ)(これはとりわけ大学生から構成された。その中には後の学生組合(フランクシュツツ)の創立者が少なくない)のための募兵活動に従事、暫く連隊長を務め、一八一五年対仏連合軍とともにパリに入城。ナポレオンの没落後、彼は更に体操による青年の訓練を推進、その方法はドイツ全土に急速に広まった。しかし、権力を回復したドイツ諸領邦の封建君主たちは、こうした青年運動が革命に結び付くことを恐れ、各地で体操訓練を弾圧、ヤーン自身も煽動者との罪名で一八一九年プロイセン政府に逮捕され、二年の禁錮刑を宣告された。判決は破棄されたが、その後も警察の監視下に置かれ、フリードリヒ・ヴィルヘルム四世がプロイセン国王に即位(一八四〇)するまで居住地を限定された。一八四八年フライブルク・アン・デア・ウンシュトゥルト選挙区からフランクフルト国民議会(議題はドイツ統一)の議員に選挙されたが、新時代にどう適合すべきかはほとんど判断ができぬまま、結局プロイセンを盟主とする世襲帝国制を支持する保守派に所属。何らの合意が得られぬまま議会が解散した後、失意の裡にフライブルク・アン・デア・ウンシュトゥルトに戻り、程なくこの地で死した。

(11) 学生組合(フランクシュツツ) Burschenschaft. 一八一五年イェナ大学で最初に結成された学生組合。祖国愛の育成と学生生活の向上を目標とした。ドイツに侵攻したフランス皇帝ナポレオンの失墜後も、依然として四分五裂の状態にあったこの国の統一が理想であったが。

(12) 『観相学的旅行』 die physiognomischen Reisen. ムゼーウスの二度目の著作『観相学的旅行、まずは観相学的日記』 Physiognomische Reisen, voran ein physiognomisches Reisebuch (四分冊。一七七八—一七九)を指す。これはその後数年で三度版を重ねるといって成功を博した。『リユーベツァールの物語』ドイツ人の民話』解説、「ローラントの従士たち」訳注参照。

(13) ネーデルランドの色彩派画家たち フラントル派の画家にして外交官でもあったベーター・パウ・ルーベンス Peter Paul Rubens (一五七七—一六四〇) およびその一派を指すか。ルーベンスは暖色を豊かに用い、激情的な輝きを持つ画風を確立した。

(14) あちこちを訂正 とは言え、文章を訂正したわけではない。ムゼーウスの勘違いか、植字工の誤まりか、それとも双方に責任があるのか、初版には定冠詞、不定冠詞の語尾などを始め、単語の綴りに不審な箇所が少なくないことは確か。

(15) ヴィーラント Wieland. クリストフ・マルティン・ヴィーラント Christoph Martin Wieland (一七三三—一八一三)。ムゼーウスより二歳年上に過ぎない彼は、ザクセン＝ヴァイマル公国公妃アンナ・アマリアによって、一七七二年公子哺育官としてその二人の子息の教育のためヴァイマルの宮廷に招聘された。ムゼーウスは一七六三年からやはり公妃により小姓教育官に任ぜられていたし、六九年以降ヴァイマルの古典語中高等学校教授だった。年配も教養も地位もよく似た二人は親しい友人同士となった。ヴィーラントはこの頃既に以前の熱狂的作風から転じて、フランス宮廷調のロココ文学に転じており、機知に富み、諷刺的で、しかも優雅な作品を次々に産み出す。こうした点でも同じ素質を持っていたムゼーウスは、彼に多大な影響を受けたと思われる。

(16) 三文文士どもやそのたわけた所業 ムゼーウスはしばしば同時代のこれらをあげつつらっている。

(17) そうした仕事 ムゼーウスがこれらの物語を執筆した十八世紀の最後の四半期にドイツ語圏その他で出版された新聞、雑誌の記事、必ずしも後世に残らなかった作家たちの著作、自然科学や社会科学上の業績、政治・戦争などを含む諸般の社会情勢等等を調べ上げて注解を施すのは大層難しい仕事。これは結局フリードリヒ・ヤーコプスのいさゝか虫の良い要請から一五〇年も経って漸く成就された。訳者が随所で参考としたノルバート・ミラーによる注解付きのウイッセンシャフトリッヒェン・ブーフゲゼルシャフト版（一九七六）である。扉の記事を以下に再録する。

Johann Karl August Musäus: *Volkmärchen der Deutschen*. 1976. Wissenschaftliche Buchgesellschaft. Darmstadt. Vollständige Ausgabe. Nach dem Text der Erstausgabe von 1782-86, mit den Illustrationen von Ludwig Richter, A. Schröder, R. Jordan und G. Osterwald zur Ausgabe von 1842. Mit einem Nachwort und Anmerkungen von Norbert Miller.

同書が挿絵をそれに拠った一八四二年の版とは、ユーリウス・ルートヴィヒ・クレー編の全一巻の豪華本で、ライプツィヒの書肆マイヤー・ウント・ヴィーガンツトから出版されたもの。すなわち Johann Karl August Musäus: *Volkmärchen der Deutschen*. Prachtausgabe in einem Bande. Hrsg. von Julius Ludwig Klee. Mit Holzschnitten nach Originalzeichnungen von R. Jordan, G. Osterwald, L. Richter u. A. Schröder. Mayer und Wiegand, Leipzig 1842. これは第五版に当たるか。

(18) コータ 「メレンザール」解題訳注参照。

## 新版のための序文<sup>(1)</sup>

フリードリヒ・ヤーコプス著

十四年以前、当時の版元である友人の頼みに応じて、この本の新版——その昔ヴィーラントが同じ奉仕をやってみせました<sup>(2)</sup>——に若干の前書きを記した時、私は、自分が更にまたもう一つの版が出るのを目にするだろうなんて、また、その際同じ仕事をまたしてもすることになるなんて、まるきりありそうもないこと、と思いました。けれどもそのありそうもないことが本当に起こりました。人気のあるこの本は同じ年（一八三五年）に序文執筆者とともに五十歳の記念日を祝ったのです<sup>(3)</sup>、別の版元の手に移された今、より美しい、いわば輝かしく変容した姿での再度の復活を嬉しがつております。そしてこの同一の序文執筆者はこれまた再度、親愛なる読者を玄関口でお迎えしてなにかしらご挨拶を申し上げ、丁度五十二年前、五十二歳の男性として大地の懐に委ねられた（1）著者についてなにかしかを述べるよう慫慂<sup>しんよう</sup>されました。この忘れ得ぬ男性の風貌を彼のいろいろな作品から組み立てた者、あるいはこれを記している人物「フリードリヒ・ヤーコプス」のようにその現世<sup>うつよ</sup>の姿を想い起こす者は、彼の子どものように善良で高潔な心根の灰燼<sup>かいじん</sup>の中でも未だに人間らしい見栄の微かな熾<sup>おほ</sup>き火<sup>び</sup>が燻<sup>くすぶ</sup>っていて、自分の本が半世紀の間享受し、今後とも享受する愛顧<sup>あいこ</sup>についていくらかで知るところがあれば、この熾<sup>おほ</sup>き火<sup>び</sup>が明るい歓喜となって燃え上がるであろうことは、なんら疑わなないでしょう。この本の最初の着想を彼の夫人は、とてもうまく行く、そして——これは儉<sup>つま</sup>し

い資産で家計を維持する場合はしばしば苦しい目に遭うことのある主婦にとって肝心かんじん要なのですが——お金になる思い付きだ、と考えました。夫人の予想は、当時の著述家たちの要求がなんとも穏当おんたうだったことを念頭に置きますと、全く当たらなかつたとは申せません。最初の分冊ですぐさま、大層売れ行きが良い、と分かつた版元は、約定やくじょうの謝礼に自発的にいくらか上乘せしなれば、という必要を良心に照らして感じたのです。そこで版元は復活祭市オーステルンメッセからの帰るさ、ヴァイマルのムゼーウスの許を訪れ、ぴかぴかのターラー銀貨を彼のまえで数え上げたのですが、小さい卓がそれで一杯になり、勘定してみるとその金額は期待を大きく上回つたので、受け取つた方の顔は喜びと感謝ではつと輝きました。それから、親切な妖精フェアリーたちが贈つてくれたこの宝を見るように、と妻子たちが呼び入れられました。なぜって、彼の常日頃の言い方によれば陳腐アンメンメルセレンなばあやお伽話お伽話が、彼に手を加えられてしかるべきものになり、それがこんなにとくさんの金を運び込んでくれるなんて、彼自身にもほとんど信じられないことだったからです。

ムゼーウスは何事によらずこの折と同様でした。至るところで示されたその進退ぶりの寡欲な慎ましき、その風貌を見ただけでいくらかは窺える無邪気な善意は、おまけのすてきな機知と諷刺精神と併せて、節度ある学識に裏打ちされ、生徒たちに対して良心的な助言者であり、しばしば第二の父であつた教職勤務においても、夫として父としての家庭生活においても明白おひら白びやくでした。その親切な天性という乳のお蔭で延び拡がっている諷刺の水脈が堰を切つてどつと溢れ出るのは大抵、己おのれ自身の人となりか夫人についての冗談冗談、あるいはさまざまな三文小説の品定めという形を取つてでした。彼はこうした三文小説の著者連を批評という驢馬の頸骨でばつたばつたと雑むぎ倒たしたので。彼の言い回しによれば、全ドイツの図書館のために。それでもだれも彼に腹を立てることはできませんでした。彼は寡欲で、生活の全てに亘つて節度があり、自己評価においては気取ることなく謙虚、世間に対してはこれを軽んじることなく礼儀正しくふるまつたので、皆に好かれ、尊敬されました。そしてこうした著者に対して起こり得たであろう

妬みからは、およそ自惚れとは無縁の人間だったお蔭で免れたのです。彼は、生き、そして栄えたその時代のドイツ人の象徴的存在だ、と言えるかも知れません。あのハルシオンの日日「平穩無事な時代」のドイツ民族は、限られた収入で良心的に職務を果たし、一日の仕事が終わると、仲の良い友人たちとその日のよしなしごとをおしゃべりして宵を過ごしたり、昔語りを物語ったり、聴いたりして、晴朗な毎日を愉しみ、陰鬱な日日は避けられないこととして耐え忍び、悠然と落ち着き払い、縄張り外のできごとには心を煩わさない、一家の父親に似ていたのではないでしようか。細かく分断されていた祖国ドイツにあつては、小さな国を切り回して行くことが、この上もなく好ましい美德の数数、とりわけ節度、それからその姉妹たちである自足、勤勉、儉約といったものの源だったので。その頃でも「ドイツ」全土で適切かつ賢明な政治が行われていたわけではありません。「ドイツ諸領邦」政府の罪業はシユレットターの『官報』および『往復書簡』の中身と本の被いに記されました。けれどもこうした記録を垣間見た善良かつ愚鈍な一般大衆は、自分の家ではずつとうまくやっている、あるいは、少なくともこれほどひどくはない、と思いました。そういう次第でロイヒフェンリングの徒党やクニツゲとかいった手合いのような底意地悪、金棒引き、偷み聴き屋がドイツ中をうろつき回り、不平面をぶらさげ、いわくありげな目配せをしたり、内緒ぶった仄めかしをやらかしても、彼らを受け入れた者は僅かに過ぎなかつたのです。どの国、どの小国も自国の君主をトラヤヌスカアントニヌスみたいな人物だと看做して満足しておりました。少なからぬ、いや、多くの欠点を君主に見出した場合でも、国民は、教育が等閑にされたからだとか、側近が悪いからだとかに、その責任を転嫁しがちでした。事態を変えられることができるはずだ、と考えたのはほんの少数の人人でした。そしてこの少数の人人もその思想や希望を胸の奥底に秘めたままにしておいたのです。こんな具合に私たちドイツ人は、既に申したように、ハルシオンの日日を暮らし、その日日の間に風浪に妨げられず全ての翡翠が安穩に卵を孵すことができました。こうした日日にムゼーウスはその『観相学的旅

行<sup>(16)</sup>を瞬<sup>かえ</sup>したり、齒無しの女たちや廢兵たちに取り巻かれて昔話<sup>メルセン</sup>を聴き、それらを朗らかなおしゃべりで再話したのです。ですから、悪戯者のリユーベツァールのごとく気の良いおふざけで私たちをからかい、時として私たちを不安にさせてもお返しに親切で役に立つ教訓という黄金をくれる、こうした陽気な物語の調べ<sup>トーン</sup>も私たちにそんな風呼び掛けて来ます。繰り返しますが、その調べ<sup>トーン</sup>は、なにかこう馴染み深い、楽しい旋律<sup>メロディー</sup>の音楽のように、あの静かな時代の心像を私たちに呼び戻します。あの時代は、慎ましい女性のように純真無垢で、これといった話題も提供しておりません。卓越した成果も比較的僅かしか挙げませんでした。しかし、まさにそれゆえに、穏やかな海にある二、三の優美な島島さながら陽光にきらめいているのですし、ぼつんと離れているからこそ、目を惹き付けて放さないのです。ここもとご覧に入れます昔話<sup>メルセン</sup>を私たちはこうした島島に数えますが、江湖の皆様という大いなる民衆審判所<sup>ヘリニア</sup>のご判断に委ねます。市<sup>メッセ</sup>から市<sup>メッセ</sup>の間に提供される娯楽読み物の膨大な備蓄を控えながらも、皆様は何度もこれを手になさり、この上も無く無邪気に、色褪せることのないその魅力をお楽しみになられましょう。と申しますのは、ここでもファウストの中で座付詩人が言っていることが当て嵌<sup>は</sup>まるからです。

ちよいと光って目立つものは一時<sup>いつとき</sup>のために生まれたので、

真<sup>しん</sup>なるものが後の世<sup>よ</sup>迄<sup>まで</sup>滅びずにいるのですね<sup>(18)</sup>。

更にまた同じ場面でのあの愉快的な御仁の忠告も同様。

まあ、あなたは平気で、しっかりした態度を示して、

空想に、ある丈<sup>だけ</sup>の取巻<sup>とりまき</sup>を附<sup>き</sup>けて聞<sup>き</sup>せて下さるんですな。

取巻は理性に悟性に感覚に熱情、なんでも結構<sup>きこく</sup>でさあ。

だが、おどけと云う奴を忘れては行<sup>い</sup>けません<sup>(19)</sup>ぜ。

ゴータにて 一八三九年六月

F・J・

#### 原注

(1) 丁度五十二年前、……委ねられた……ヨーハン・カール・アウグスト・ムゼーウスは一七三五年イエナに生まれた。一七六三年ヴァイマルの宮廷で小姓教育官となり、次いで古典語<sup>キョクム</sup>中高等<sup>ナナジウ</sup>学校教授<sup>ウツム</sup>となった。一七八七年十二月逝去。死の二年後ヴァイマルの教会墓地<sup>キョウイ</sup>に、何人<sup>ナニヒト</sup>によるものか不明だが、記念碑が建てられた。これには良く似ている浅浮<sup>ハスレ</sup>き彫<sup>リ</sup>りと「忘れ得ぬムゼーウスに」との銘が刻まれている。

#### 訳注

(1) 新版のための序文 Vorrede zur neuen Ausgabe. 一八三九―四〇年可愛らしい六分冊でハレ・アン・デア・ザーレ(当時ヴァイマルやゴータが属していたテューリッゲン諸領邦からさほど遠からぬザクセンの有力都市。ただしザクセン王国ではなく、プロイセン王国領)の書肆エドムント・ハイネマンから出版された「ドイツ人の民話」新版序文。同書第一巻の扉は以下のごとし。

J. K. Müslius: *Volksmärchen der Deutschen*. Mit einem Vorwort von Friedrich Jacobs. Erstes Bändchen. Neue Auflage. Halle. Verlag von Ed. Heynemann. 1839.

全巻見返しの次に著名な画家テオドール・ホーゼマン(Theodor Hosemann) (一八〇七―七五) 描く美しい口絵が一枚づつ付いている。原注あり。注釈無し。

(2) その昔……やってみせました ムゼーウスの没後一八〇三年、友人ヴィーラントが『ドイツ人の民話』の第二版を出版した。



- (3) 序文執筆者とともに五十歳の記念日を祝った。「一八二五年版のための序文」の訳注「フリードリヒ・ヤーコプス」でも記したように、これは奇妙な言及である。ヤーコプスは一七六四年生まれなので。
- (4) 輝かしく変容した姿での再度の復活 イエス・キリストの「復活」と掛けている。
- (5) ターラー銀貨 通貨単位としてのターラーではなく、種類(ラテン語「スペキエス」species)としてのターラー銀貨。一七五三年以降協定(コンvention)シユベツイエスターラーがこう呼ばれた。西欧各地で信頼された貨幣である。一七九五年の銀貨は直径四センチ。それゆえ、版元が払った銀貨がこの大きさで、仮に「小さな卓」が四〇×六〇センチだったとすると、十×十五＝百五十ターラーにもなる。ちなみに「リユーベツァールの物語第参話」では、実直なお百姓フアイトどんは、山の精リユーベツァールが貸してくれた百ターラーで、耕地を一枚、干し草刈り場を一箇所買い込み、これを基にしてすっかり身上(としよう)を恢復、裕福に成る、との設定。また、かの「石鹼作りのビュルガー君」(ムーゼウス「緒言」参照)は、一七七二年ハノファー選帝侯国内のある領主の許で領地管理官となるが、年俸百五十ターラー、別に住宅手当三十ターラー、というもの。牧師を職とした彼の父は年収百六十ターラーだった由(ビュルガー編・荒井皓士訳『ほらふき男爵の冒険』岩波文庫、一九八三年、解説に拠る)。
- (6) 夫人についての冗談 ムゼーウスは女性の好奇心を時時揶揄している。それを指すか。
- (7) 驢馬の頸骨で……薙ぎ倒した ユダヤの大力の勇者サムソンは、同胞に縛られて敵のペリシテ人に引き渡されたが、新しい驢馬の頸骨を武器に千人を打ち倒した。旧約聖書士師記十五章十三―十六節。
- (8) ハルシオンの日 Halyonische Tage. ハルシオンは、冬至の頃海の上に浮き巣を作り、風浪を鎮めて卵を孵す、とされた古代ギリシアの民間信仰上の鳥。従って「ハルシオンの日」は冬至前後の天候の穏やかな二週間、あるいは平穏な時代を指す。また、ハルシオンは翡翠と同じ視されることもある。
- (9) シュレッターの『官報』および『往復書簡』の in Schloerischen Staats-Anzeigen und Briefwechseln. アウグスト・ルートヴィヒ・フォン(一八〇四以降)・シュレッター August Ludwig von Schloer (一七三五一―一八〇九)は公法学者にして歴史研究家。彼の『往復書簡』 Briefwechsel (一七六―一八二〇十卷)、『官報』 Staatsanzeigen (一七八三―一九三。十八卷。一七九三禁書)、『子どもたちのための世界史準備』 Vorbereitungen zur Welgeschichte für Kinder (一七七九)は影響するところ大だった。
- (10) 人の被(おび) 未詳。
- (11) ロイヒフェンリンダの徒党 die Leuchtenings フランツ・シビヤエル・ロイヒフェンリンダ Franz Michael Leuchtening (またの名リフランツ・モンシエール Mönseur Liferin) (一七四六―一八二七)は疾風怒涛運動の感傷的作家の一人。ヘッセン＝ダルムシュタット方伯国太子の次席家庭教師であった折、フリードリヒ・ハインリヒ・ヤーコビ Friedrich Heinrich Jacobi (一七四三―一八一九)、ヨハン・ハインリヒ・メ

- ルク Johann Heinrich Merck (一七四一—一七九二)、ヨーハン・ゴットフリート・ヘルダー Johann Gottfried Herder (一七四四—一八〇三)、ゲテラと交際。ゲテは彼を「お粥小父さん」 Vater Brey とからかっている。一七八二年ベルリンに赴き、既成宗教に反対する啓明結社 (一七七六結成) の成員でもあった彼は、秘密結社、とりわけ解散させられていたイエズス会の陰謀を摘発するという活動によって、この地で騒ぎと反駁を巻き起こした。一七九二年フランス革命に熱狂してパリへ。
- (12) クニッゲ Knigge. クニッゲ男爵アドルフ Adolf Freiherr von Knigge (一七五二—一九六)。一七七一年カッセル (ヘッセン＝ダルムシュタット方伯国の首邑) の軍務局・御料局官吏となったのを振り出しに、一七七七年ヴァイマル (ザクセン＝ヴァイマル公国の首邑) において待従、一七九一年神聖ローマ帝国直屬都市ブレームンで法官。啓明結社の成員としてイエズス会や善徳十字会に対する反対運動を展開。その最も有名な著述は実用的処世訓集成『人間の交際について』 *Über den Umgang mit Menschen* (一七八八) であって、多くの版を重ねたが、現代ではかなりこちたき印象を禁じ得ない。
- (13) トラヤヌス Trajan. ローマ皇帝マルクス・ウルピウス・トラヤヌス (五二—一〇七)。先帝ネルウアの養子となり、跡を継ぐ。対外的および内政面でローマを安泰にし、節度のある簡素な私生活を送った英明な君主。いわゆる五賢帝の一人。
- (14) アントニヌス Antonin. ローマ皇帝ティトウス・アウレリウス・フルウス・ポイオニウス・アリウス・アントニヌス (八六—一六二)。ハドリアヌス帝 (これもトラヤヌス帝の養子) に後嗣として選ばれた。人間的な法律改革を行い、公共事業を整備、税の軽減を図るなど内政面で卓越した業績を残した。いわゆる五賢帝の一人。
- (15) その『視相学的旅行』 seine Physiognomischen Reisen. ムゼーウスの第二作で、大いに人気を博し、版を重ねた著作。『リュエベツァールの物語』ドイツ人の民話』解説、「ローラントの従士たち」訳注、フリードリヒ・ヤコブス「一八二五年版のための序文」訳注参照。
- (16) 歯無しの女たちや廃兵たちに……昔話を聴き ムゼーウスは文書からも資料を得ているが、老女や老退役兵を集めて昔話を採録したのも事実である。ちなみに後代グリム兄弟が取った方法も、聴き書きと書籍など文書に拠る採録という点では、本質的にこれと同じ。
- (17) 民衆審判所 Volksgericht. ギリシア語。アテナイの民衆法廷。立法家である賢人ソロンによって創設された。あらゆる階級の市民で構成。一種の控訴審。
- (18) ちよいと光って……滅びずにいるのですね。ゲテ『ファウス』七三—七四行。劇場での前曲の座付詩人の科白。森嶋外訳に拠る。ただし新仮名遣いに改めた。
- (19) まあ、あなたは……だが、おどけと云う奴を忘れては行けません。前掲書八五—八八行。劇場での前曲の道化方の科白。森嶋外訳に拠る。ただし新仮名遣いに改めた。

## 一八四二年版序文

ユーリウス・ルートヴィヒ・クレール著

ドイツの読書界にここに改め美しい装幀版にてご覧に入れる『ドイツ人の民話』の語り手の経歴は極めて簡潔で、僅かの言の葉で申し上げられる。ヨーハン・カール・アウグスト・ムゼーウスは一七三五年イエナに生を享けた。父はこの町で地方裁判所判事の職にあつたが、その後間もなく顧問官兼高級領地管理官としてアイゼナツハへ転任した。ムゼーウスは青少年期を九歳から十九歳まで、教育を引き受けてくれた近い親戚大教区監督ヴァイセンホルンの許で過ごした。最初はアルシユテット、それからアイゼナツハで。イエナ大学で神学を学び終えてから、彼はここへ牧師補として戻った。しかし、近郊のある村で牧師に就任するという見込みは挫折した。彼がある時ダンスをした、という理由で、農夫たちが受け入れを拒んだのである。一七六三年ムゼーウスは小姓教育官としてヴァイマルに招聘された。更にこの地で一七七〇年以降、古典語中高等学校の教授として生涯を送る。乏しい収入——これは副業、後には特に執筆（夜の時間帯しかこれに充てることができなかった）によって苦心して補わねばならなかった——も、頻繁に再発する肉体的苦痛も、常に晴れやかな彼の精神を曇らせることはできなかった。穏やかに節度ある彼は家庭生活に恵まれたし、これを楽しんだ。このことは、妻のユリアーネ、旧姓クリューガー（彼との間に二人の子息を生んだ）に捧げられた幾つかの詩、これらの詩と同様、遺稿集（二七九一。編集者はA・v・コツェブー）で活

字となつてゐる少なからぬ書簡が見事に証明してゐる。彼はだれからも敬愛されたが、殊に親交を結んだのはヴァーラントとベルトゥーフである。女公にして公母アマリア様も彼を重んじ、周囲に集めていらつしやつた有為有能な人人の団居に引き入れられたもの。このことについても彼は前述の書簡の中で、この友なるご婦人「アンナリアマリア」に宛てて、ゲーテによつて有名になつたエッタースブルクにおける素人芝居の幾つもの上演に自分も一役買ったことを記してゐるし、中でもゲーテの「ブルンダースヴァイレレンの歳の市祭」でアハシユエロスを演じた、と報告してゐる。——自身予知はしてゐたものの、突然の死に襲われた彼は、一七八七年十月二十八日に世を去つた。埋葬の当日、彼が教師として誠心誠意務めた古典語中高等学校の講堂で、その頃宗教局副局長だつたヘルダーは、「性格は天真爛漫、心根は温雅善良という点で一人の子ども、孜孜としてたゆむことなく勤勉、かつ、諸人の幸福を愛したという点で一個の男子、朴直な男子だつた故人」という弔辞を捧げて彼を讃えた。ムゼーウスは、これもヘルダーが述べてゐるように、「自己を律するには厳しく、その分他者に対しては寛容かつ親切で、神、職務、学校の同僚、生徒、そして友人たちに対し誠実だつた。彼は人好きのする人懐こい性分で、一度として義務を放棄することなく、それどころか、その苦しい人生の重荷を、明朗快活、どこを風が吹くという様子で、洒落のめし、上機嫌で担つた。吐息をついたり、愚痴を言つたりすることはなかつた。鬱陶しいことがあつても現実には甘んじ、未来はもつと軽やかだらうと期待し、心愉しくそれを待ち受けた。このうつせみの世で味わえはしなかつたのだが」。ヴァイマルの教会墓地にある彼の墓にはある友人によつて記念像が彫られた。これを模写した図が前述の遺稿集の挿絵となつてゐる。この遺稿集掲載の肖像画を写した絵をこの序文の冒頭に掲げた。

初めてムゼーウスが著述家として登場したのは一七六〇年のこと。諷刺長編小説『二代目グランディソン』(三分冊)を引つ提げてである。これは、その当時リチャードソンの『グランディソン』にドイツが感じた法外な驚きに対

する、そしてそれ以上に、これと関連して、リチャードソンの作中人物を実人生でも模倣しようと腐心する多くの連中に対する反発だった。長い合間——この期間には数点の、比較的小さな、さして価値の無い作品があるが——の後、一七七八年二番目のかなり大部な著作が刊行された。ここで彼は先と全く同様時代の愚かしさに対抗している。『観相学的旅行』<sup>(22)</sup>（四分冊。再版一七八一）である。この作品で彼が才氣溢れる機知<sup>ウィット</sup>を駆使して揶揄<sup>やぶ</sup>しているのは、無数の支持者が追隨していたラーヴァーターが、観相学から人間の精神的本質を極めて詳細な点に至るまで認識しよう、と志して陥った度の過ぎた熱狂ぶりである。この本は素晴らしい喝采を博し、匿名で書いたにも関わらず、彼こそ著者だ、ということがすぐに知れ渡り、その名声は揺るぎないものになった。けれども、一七八一年、八二年と（二分冊で）出版した『グランディソン』の改作は特に当たらずじまいだった。本物の『グランディソン』自体がだんだん忘れ去られていた、少なくともはやもてはやされてはいなかったから、というわけでもないようだ。ムゼーウス自身かの友なるご婦人宛ての書簡にこのことについて記し、同時に自分がどうして<sup>フォルクスメルヒエン</sup>民話を出版しよう、と思い立ったかに言及している。「私の著述家としての審判に関して申し上げますれば、以前上梓いたしました『グランディソン』の今日化<sup>こんにちか</sup>を昨秋終え、この本を有意義にするための手立ては能う限り何一つゆるがせにはいたしませんだ。なにせ、あれは二十年前の我が文学的初生<sup>はつな</sup>りでございましたから。ところが心痛んでなりません。一向小説読みの人人の目につかずじまいなのです。現在に至りましても、一年前出版つかまつりました第一分冊を忝くも推薦してくださろうという識見ある新聞がございませんので。そこで、走るには早くないのが役に立つ「のんびり構えるのがなにより」、と達観。『観相学的旅行』の折はとんと大違い、風評<sup>フッパ</sup>の女神<sup>イマ</sup>は盛んに喇叭<sup>トロン</sup>を吹き鳴らしてくれました「大評判になりました」しね。さてそれ以来私は小説家組合<sup>ギルド</sup>の仲間たちに憤懣<sup>フンマン</sup>を發散し、こうしたペリシテ人<sup>ピト</sup>ども三十人を「総合図書館<sup>アルトマイネヒブリオテーク</sup>」で批評という驢馬<sup>ロバ</sup>の頸骨を武器に撃ち伏せました「文芸批評で三十人の作家をやっつけ、気持ち

を宥なだめました」が、その後ある着想に逢着いたした次第でございます。妖精物語は再び活気を呈しつつあるやに見受けられます。フォス学校長(28)と領地管理官ビュルガー(29)は競って『千一夜物語』を当世風にしようとしております。妖精昔話(30)さ、エイエナで……年……更(31)にまたニュルンベルクの書肆(32)で改めて上梓されました。私はかかる一味徒党に与するつもりです。そして自分の轆轤台(33)からこうしたたぐいの造り物を繰り出しているところです。題名は『民話、大きな子どもと小さな子どものための読本』*Volksmärchen, ein Lesebuch für große und kleine Kinder*とあいなりましよう。そのため私は陳腐(34)なばあやお伽話(35)を蒐集、手を加え、元より更に十倍も不思議なものにいたします。これがとつてもお金になるお仕事になればよろしゅうございますわね、と我が愛する妻は願っております。私の可愛い名付け子ちゃんには素晴らしい装幀の二冊を献呈いたしましょう。この作品が売り台に並びましたら』。けれども本当に売り台に並んだのだ。一七八二年から八七年に掛けこの『ドイツ人の民話』*Volksmärchen der Deutschen*が五部に分かれて世に現われた。これが江湖に歓迎された様子と来たら、作者に彼の着想がなんとも幸運だったことをまざまざと示した。ムゼーウスは国民の愛読して止まぬ作家となり、彼の『観相学的旅行』とは嗜好上いかにせんご縁の無いままだった階層においても、『ドイツ人の民話』は先を争って買われ、大喜びで読まれた。受けて当然のこの名声を享受する時間には僅かしか与えられなかった。ムゼーウスは民話の最後の巻が刊行された——重版がすぐこれに続いた——同年に死ぬ。その二年前彼はシュレンベルク(36)によってホルバイン風(37)に描かれた挿絵の死神殿(38)の恰好について詩的な注を施したばかりだった。一七八七年に出た孔雀の羽根叢書(39)の第一巻には彼の四つの短い物語が入っている。ベルトウーフは遺稿の中から、フランス語文献の翻案である『子どもと子どもでない人のための道德的がらがら』(40)を一七八八年出版した。

しかしながらムゼーウスの名前を永続的にドイツ人の記憶に留めたのは、なにはさておき『ドイツ人の民話』であ

る。これに誘発されたさまざまな模倣は、ベネディクテ・ナウベルトの愛らしい昔話集を除いては忘れ去られてしまった。さもありません。ムゼーウスの『ドイツ人の民話』は繰り返し出版された。その一つはヴィーラントの一八〇六年版で、一八二五年、一八三九年と、更にもう二つの版の編集に当たったのはフリードリヒ・ヤーコプスである。これらは現今に至るまで引き続き読書界の眷顧を蒙っている。このように愛好されているのは何ゆえなのだろう。こうした疑問に答えるには、本そのものを指し示すのが一番だと思う。これこそムゼーウスの名が長く伝えられる保証になる、とヘルダーも看做した精神のあのような快活さが分かる感受性さえあれば、本は満足すべき解答となる。ヘルダーは、上質の諧謔、清朗な機知、明敏な心理学的観察、最後にこれが決め手だが、軽快で活き活きとした、ただし通常の尺度から彷徨い出すことがしばしばである描写ぶりを楽しんでいる。それから、これらの物語の本来の素材である昔話や伝説に内在する诗情に対する感覚が麻痺していないことが大切。グリム兄弟が彼らの素晴らしいドイツの『子どもと家庭のための昔話集』で真なるものを教え、論証してくれた今となつては、昔話なるものは、その本質の根源とその诗情の純粹な美しさにおいてこれを示すことが肝要な場合は、ムゼーウスに見出されるのとは違った評価法と語り口を要求する、ということをおかしがる。しかしながら、ムゼーウスが著述を行った時代のあつた認識はそもそも異質なものであったのだ、ということは別として、彼が古い昔話を自己の文学に利用し、彼の諧謔に満ちた特質が自在に創作を行うために拠つて立つ、いわば核として採用した遣り方もまた美学的正当性を持つ、と思われる。そして、ドイツ民族文学のこうした分野で初めてかなり大きな注目を集めたのは彼の功績であるが、昔話の再話者たちが陥りがちな最悪の誤謬、つまり、いわゆる文学的な美化から彼を守つたのも、古き時代の昔話や伝説に素材が存在することを彼に悟らせたのと同じ健全な天性なのである。ムゼーウスが当初想定した読者を楽しませたのより更に更に滋養になる、更に効き目の強い空想力の養分として役立ったのがこの素材。



けれども彼自身が『ドイツ人の民話』出版の際抱いていた目的についてここで語るには及ぶまい。けだし、彼が第一巻巻頭に配した「ダーフィット・ルンケル殿に捧げる緒言」の中で彼自身愉しげに、このことに関して、また、昔話メルヘンの扱い方と刊行の動機についても明瞭に語っているから。そしてそれゆえにこそ、ヤーコプスの版では省かれているこの「緒言」を本書では採録するのが必要不可欠である、と判断した次第。ムゼーウスが引き合いに出し、かの聖物保管係が小粋な乙女に求婚している様子が描かれているゲッティンゲン携帯暦ポルターの銅版画も、模写してお目に掛けたかったのだが、ホドヴィエツキイドの小品の繊細優美さを考えると、かようなことを試みるのはどうにも憚られた。ムゼーウスが昔話メルヘンの材料をどのような手段・方法で集めたかという点に関しては、当節好みの歴史的完全性のためだけでも、コツエブードがそれについて語っている文言を見過ごすことはできない。ムゼーウスは携えた糸車もろとも老婆たちドに自宅に来てもらい、自分の前でしゃべらせた。街路から子どもたちを呼び寄せて、彼らが聞かせてくれる話一つにつき三プフエニヒ銅貨ドを一枚やったりもした。「ある晩のこと夫人が訪問先から帰宅した。部屋の扉を開けると、安煙草の煙がもわつと彼女を出迎えた。この濛気モウキを透かして見えたのは、一人の老兵士を横メルヘンに置いて暖炉の傍に座っている夫の姿。兵士は短い煙管パイプを齒の間にくわえ、これをいとも盛大にくゆらして、夫に昔話メルヘンを物語っていた」。ムゼーウスが、最初の三つの物語の素材になっていて、本来ならグリムの『昔話集』メルヘンの第三部（三三七ページ、四〇九ページ）とも比較され得よう昔話メルヘンや、他の物語に用いられている伝説の大半と、口伝えの伝承によって近づきになったのは疑いの余地はない。もつとも、全ての物語の源泉が口承文芸というわけではない。少なくとも「リップッサ」の場合、その伝説をどこから知るに至ったか、その書籍の名を彼自身挙げています。

今回の出版について更に若干述べておかなければならないことがある。芸術愛好家の書肆によって潤沢かつ高尚に賦与ふよされた装飾についてはない。余計な前口上などこれには不要だからである。名声高い芸術家たちが、『ドイツ

人の民話』が提供した豊かな材料を、いかに楽しみ、いかに巧みに利用したか、どのように作品に刺激されて自身の創造を行い、また、どのように作品の精神ガイストに没入したか、読者ご本人でお分かりになるかと申すもの。しかしながら本文テキストに関してはちよつと付言しておくべきであろう。我我は、ムゼーウス自身の手になる変更のない本文テキスト以外のものを使う決心がつかかなかつた。それゆえ、まだ完全に作者本人によつて編集された唯一の版である、一七八二年から八七年にかけての最初の版によつて本文テキストを忠実に再現し、正書法および句読法における場合のみ逸脱をあえてした。こうした逸脱については弁解する必要はほとんどあるまい。一七八七年、八八年に刊行された第二版には、これまで当たつた限り、「緒言」に幾つかの些細な変更があるだけで、その他の点では初版の無変更版である。ヤコプス編集の版が全般的に従っているヴィーラント版において、彼ヴィーラントがそこで施した変更はもとより大して重要ではない。それらはおおむね外国語をドイツ語に置き換えることに限られている。しかし、ヴィーラントの方針が決して首尾一貫したものではなかつたのみならず、彼の努力は常にうまく成功したとは言えず、しばしば語り口をより軽妙にするのではなくむしろ鈍重にしてしまい、ムゼーウスが明らかに叙述に一種独特な風合トインいを持たせるために意図的に外国語を用いた諧謔的な箇所トインで、この風合トインが全くもつて消し去られていることも少なくない。さてそもそもヴィーラントの執つたような方針はもはや時宜ジギを得ていないのであつて、他人の作品を出版する者に当然ながら要求されるのは、著者が書いた通りに出版し、変改は、たとえ修正であろうとも、慎むことである。ムゼーウス自身によりあちこちに付けられた注は本文テキスト下部に置かざるを得なかつた。僅かだがヴィーラントが原注に付け加えている注も採択し、W. と記した。しかしながら、版の印刷上の美観を配慮すると、後者は、当節あまり使われなくなっている言葉や、そうともしなければかなりの読者には皆目理解されないであろう若干の箇所を説明するために我我自身が附した注と全く同様、本文テキスト下部ではなく、個々の巻の巻末に廻30すのが得策であろう、と思われた。作者在世当時

の文学的問題ないしその他の事象に対する彼の皮肉な示唆をいちいち説明するような注解を提供することは意図しなかった。そして事実、そうしなくとも、そのような示唆の大部分、いやとにかく極めて多くが、本来の話題についての精確な知識が無くても、作者の意図が少なくとも大略は明瞭に表れているたぐいのものなのである。

この序文を結ぶに当たり、『ドイツ人の民話』がこの新しい版でもこよなきご愛顧を忝くすることを、そして、そのご愛顧がただ単に装幀の美しさによって与えられるのではないことを、念願せずにはいられない。『ドイツ人の民話』はその内容によって、著者の愛すべき恬淡さてんたんによって、全体を満たしている明朗闊達な感性スインによって、最新のドイツ文学にすらそうそうは認められないさまざまな特性によって、既に充分ご愛顧を贏かちえるに価している。

一八四二年三月 ライプツィヒにて

ユーリウス・ルートヴィヒ・クレー

### 訳注

- (1) イエナ Jena、テューリンゲン東部、ザール河畔の古都。当時ザクセン＝アイゼナツハ公国領。
- (2) 父 ヨーゼフ・クリストフ・ムゼーウス Joseph Christoph Musäus (生没年未詳)。
- (3) 高級領地管理官 Oberamtman、領地管理官は王や公侯に代わって一定の地域の行政を任された官吏。
- (4) アイゼナツハ Eisenach、十二世紀創設の由緒ある町。ザクセン＝アイゼナツハ公国の首邑。一七四一年ヴィルヘルム・ハインリヒ公の死とともに公国は消滅、ザクセン＝ヴァイマル公国(ザクセン＝ヴァイマル＝アイゼナツハ公国)の所有となる。
- (5) 大教区監督 新教の聖職位。カトリックの司教に当たる。
- (6) ヴァイゼンホルン Weizenhorn、未詳。

- (7) アルシュテット Alstedt. 綴りは異なるが同音のアルシュテット Alstedt であろう。北部テューリンゲンの小さい町。当時も教育施設は整っていたようだ。
- (8) 頻繁に再発する肉体的苦痛 クレーはそれが何だったのか具体的に記していない。
- (9) ユリアーネ、旧姓クリューガー Juliane, geb. Krüger. エリーザベト・ユリアーネ Elisabeth Juliane (生没年未詳)。
- (10) A. v. コツェプー A. v. Kotzebue. アウグスト・フォン・コツェプー August von Kotzebue (一七六一—一八一九)。一七八〇—一八一一年故郷ヴァイマルで弁護士。一七八一—九〇年ロシア帝国に仕官。その後パリとマインツに居住。一七九五年以降レヴァル(現エストニア共和国)の都市。当時ロシア帝国領。近郊の自分の荘園で著作に従事。当時人気は博したが、今日では通俗作家とされている。ムゼーウスの甥に当たる。
- (11) ヴァイラント Wieland. クリストフ・マルティン・ヴァイラント Christoph Martin Wieland (一七三三—一八一三)は(これまで随所而言及したように)ヴァイマルにおけるムゼーウスの親友だった。彼はザクセン＝ヴァイマル公妃アンナ・アマリアによって一七七二年ヴァイマルに招聘され、その公子二人の傳育官となった。世継の公子カール・アウグストはその一人。カール・アウグスト(一七五七—一八二八)は一七五八年公(一八一五年以降大公)位を襲うが、一七七五年十八歳になるまで、母アンナ・アマリアの後見下に置かれた。
- (12) ベルトーフ Bertuch. フリードリヒ・ユステイン・ベルトーフ Friedrich Justin Bertuch (一七四七—一八二二)。ヴァイマル在住の著述家にして出版業者。一七八四年イエナの『一般文芸新聞』Allgemeine Literaturzeitung の共同創始者となる。一七八六年以降、ゲオルク・メルヒオール・クラウス(一七三二—一八〇六)と共に風俗史上啓発的な「贅沢と流行の雑誌」Journal des Luxus der Moden を刊行。「メレクザーラ」訳注「流行の雑誌」をも参照。
- (13) 女公にして公母アマリア様 die edle Herzogin Mutter Amalia. 前掲訳注「ヴァイラント」参照。
- (14) エッタースブルク Eittersburg. ヴァイマル北方の石灰岩質の低い丘の連なりエッタース山(四七八メートル)には小さな村と二つの城があった。このうち一つがザクセン＝ヴァイマル公家の御料地に変えられ、この場所に一七二二年城館が建てられた。これがエッタースブルクの城館で、ヴァイマル宮廷はしばしば文学的の祝祭を催し、ゲーテの戯曲などが演じられた。
- (15) 「プルンダースヴァイレレンの歳の市祭」Jahrmaktsfest zu Plundersweilern. ゲーテの書いた笑劇。プルンダースヴァイレレンの歳の市呼び売りの商人や豚肉屋、農夫、「去勢」牡牛取引業者、馬車の車軸油売り、胡椒菓子商いの娘など、売り手たちは自分の持って来た品物を売ろうと一所懸命。一方客たち(従僕、牧師、夫人同伴の領地管理官、女性傳育官、令嬢たちなど)はのんびり構えて、なかなか買おうとしないどころか、ぶらりぶらりと冷やかしを楽しんでいる。旧約聖書エステル記に素材を借りた『劇中劇エステル物語』Historia von Esther in Drama が催される。(二)での登場人物は、インドからエチオピアまで治めるアハシエロス王、そのお気に入りの大臣ハマン、ユダヤの美女でアハシエロス王の王妃となったエステル、その従兄で養父のマルドハイ。一七七八年十月二十日エッタースブルクの城館で上演された。

- ゲート自身、呼ばれ売りの行商人<sup>マルクトシユライアー</sup>、ハマン、マルドハイに扮した。
- (16) アハシユエロス *Ahasverus*. 前掲注参照。口語訳旧約聖書エステル記ではクセルクセスとなっている。
- (17) 宗教局 *Consistorium*. カトリックでは枢機卿会議、英国国教会では主教区法院に当たる。
- (18) ヘルダー *Herder*. ヨーハン・ゴットフリート・フォン (一八〇二以降)・ヘルダー *Johann Gottfried Herder* (一七四四—一八〇三)。一七七〇年ストラスブール(フランス王国領)を訪れたヘルダーは大学に遊学していたゲートと相識る。ゲートは若いザクセン・ヴァイマル公カール・アウグストの招きに応じてヴァイマルに赴き(一七七五年十一月七日到着)、この地で枢密閣議の成員に任命され(一七七六年七月十一日)、小国とはいえ政治の中枢に参画することになる。そのゲートの推輓によりヘルダーは一七七六年春、総大教区監督<sup>グロース・バイエルン・エレクトロリツム</sup>「大教区監督」がカトリックの「司教」に相当するなら、「総大教区監督」は「大司教」か、上級宗教局の成員、市教会の主席牧師としてヴァイマルに招聘された。その前の職はビュッケブルクなるリッペ伯爵家の主席牧師(一七七一年から)である。
- (19) ある友人 *einen Freund*. 男性形である。ヴァイラント(前掲訳注「ヴァイラント」参照)であろうか。
- (20) この遺稿集掲載の肖像画を写した絵をこの序文の冒頭に掲げた。この一八四二年版序文冒頭の肖像画は彼の風貌を伝える数少ない資料である。
- (21) 「二代目グランディオン」 *Grundison der Zweite*. 『二代目グランディオン』、あるいは、書簡体に仕立てた某氏の物語『*Grundison der Zweite, oder Geschichte des Herrn N.\*\*\* in Briefen entworfen*』のこと。「バミラ」や『クラリッサ・ハロウ』などを著した英国の小説家サミュエル・リチャードソン(一六八九—一七六一)の『サー・チャールズ・グランディオン』(一七五四)の感傷過多ぶりをパロディ化したもの。
- (22) 「親相学的旅行」 *Physiognomische Reisen*. 『親相学的旅行、まずは親相学的日記』 *Physiognomische Reisen, voran ein physiognomisches Tagbuch* のこと。スイスの神学者ヨハン・カスパー・ラーヴァーターの『人間知識と人間愛促進のための親相学的断章』 *Physiognomische Fragmente zur Beförderung der Menschenkenntnis und Menschliche* (一七七五—一七八)の滑稽なまじり。
- (23) 「グランディオン」の今日化 『ドイツのグランディオン』 *Der deutsche Grundison* (一七八一—一八二)のこと。
- (24) 風評の女神 *Fama*. ラテン語 *fama* (噂、風説、名声) から。ローマの詩人たちが人格化して神とした。
- (25) 「総合図書館」 *Allgemeine Bibliothek*. ヘルリン啓蒙主義運動の主要機関誌「総合ドイツ図書館」 *Die allgemeine deutsche Bibliothek* のこと。ムゼーウスは一七六六年からこの雑誌に拠って文芸批評に当たった。
- (26) 驢馬の頸骨を武器に撃ち伏せ 旧約聖書士師記十五章十五節によれば、大力のサムソンは驢馬の頸骨を武器としてペリシテ人千人を殺した、とか。「メレクザラ」訳注「千ものペリシテ人」をも参照。
- (27) 妖精物語 *Fairy*. 「フェーエライ」は通常、妖精や魔物の活躍する世界、つまり妖精の世界を指すが、ムゼーウスは『ドイツ人の民話』緒言において、フランスの妖精物語の意味で用いている。後掲訳注「妖精昔話」をも参照。

- (28) フォース学校長 Rector Vob. 文人にして文献学者ヨーハン・ハインリヒ・フォース Johann Heinrich Vob (一七五二—一八二六)。一七八一—八五年、六巻から成る『千一夜—アラビアの物語』Die tausend und eine Nacht. Arabische Erzählungen. をプレーメンで出版。これは『千一夜物語』をヨーロッパに初めて翻訳・紹介したアントワーン・ガラン (一六四六—一七一五) の『千一夜—ガラン氏によりフランス語に移されたアラビアの物語』Les mille et une nuits. Contes Arabes, traduits en Français par M. Galland (一七〇四—一七。全十二巻) のドイツ語訳である。彼は一七七八—八二年、ハノーファー選帝侯国の小さな町オッテンドルフ、次いでオルデンブルク公国の都市オイティンで学校長を務めた。「ムゼーウス緒言」訳注「学識高きフォース学校長」をも参照。
- (29) 領地管理官ビュルガー Amtmann Bürger. 詩人ゴットフリート・アウグスト・ビュルガー Gottfried August Bürger (一七四七—一七九四) は、「ゲットینگゲン芸術文芸雑誌」Das Göttingische Magazin der Wissenschaft und Literatur の『千一夜物語』の翻訳計画を告知したが、これは実現しなかった。彼はハノーファー選帝侯の臣下である封建領主スラー家の領地管理官 (一七七一—八三) を務めた。「ムゼーウス緒言」訳注「石鹼作りのビュルガー君」をも参照。
- (30) 妖精昔話 Feenmärchen. こゝでは、一七〇〇年前後数十年に亘り、フランスの中・上流家庭で読まれ、語られ、あるいは書かれた妖精物語 contes des fées を指している。たとえばオーノア伯爵夫人 Comtesse d'Aulnoy (一六五〇—一七〇五) は物語集『新小説あるいは当世風妖精たち (別名『名高き妖精たち』) (六巻) Contes nouvelles, ou les fées à la mode (Les illustres fées) を書いた。これは十八世紀までもずっと続くお伽話の一大潮流の源となった。こうした妖精お伽話の最初の集成は『妖精文庫』Le cabinet des fées なる題名で九巻本としてネーデルラント共和国 (現ネーデルラント王国・オランダ王国) の首都アムステルダムで刊行された。うちオーノア夫人のお伽話が三巻を占める。ニユルベルクの出版業者ラスベは一七六一—六六年同様に九巻の『妖精文庫』Kabinet der Feen を新たに出版した。「ムゼーウス緒言」訳注「オーノア夫人」をも参照。
- (31) ニユルベルクの書肆「ムゼーウス緒言」にいわく。「ニユルベルクなる賢明なラスベは独自の思惑により既に数年前から洞察していたのです。彼はオーノア夫人の『妖精文庫』の古色蒼然たるきこちない翻訳を九巻の新版として逸早く出版いたしました」。前掲訳注「妖精昔話」後半参照。
- (32) 妖精昔話さへイエナで……年……更にまたニユルベルクの書肆で改めて上梓されました。クレーは、ムゼーウスの書簡をその『遺稿集』からここに引用する際、少なくとも一行抜かしてしまっただとしか考えられない。原文を以下に挙げておく。どなたかご高教を。  
…… selbst die Feenmärchen sind in Jena das Jahr wieder im Nürnbergschen Verlag von neuem gedruckt worden.
- (33) 私の可愛い名付け子ちゃんには meinem lieben Patchen. 女公アンナ・アマリアの幼少の親族のだれかを指すか。
- (34) 一七八二年から八七年にかけて 一七八二年から八六年に掛けての出版と思うが、原文のままにしておく。

- (35) シェレンベルク Schellenberg. ヨーハン・ウルリヒ・シェレンベルク Johann Ulrich Schellenberg (一七〇九—一九五) か、その息子ヨーハン・ルードルフ・シェレンベルク Johann Rudolf Schellenberg (一七四〇—一八〇六) を指す、と思われる。いずれもスイスの画家。
- (36) ホルバイン Holbein. 小ハンス・ホルバイン Hans Holbein, der Jüngere (一四九七/九八—一五四三)。父大ハンス・ホルバインや、兄アンブロジウス・ホルバインとともに有名な画家。三者のうちで最も傑出した存在、とされる。骸骨姿の死が、教皇・皇帝・王侯から下下に至るまでの男女と手に手を取って踊りつつ、この世から連れ出して行くさまを描いた二連の図「死の舞踏」は最も有名。
- (37) 死神殿 Freund Hein. 「ハイン」Hein は男性名ハインリヒ Heinrich の愛称。「友なるハイン」「ハイン君」くらいの意。
- (38) 孔雀の羽根叢書 Straußfedern. これは、「読む者に、伝説や民衆本の不思議な世界への逍遙を——もしかするとムゼーウスが元来意図したよりも強く——皮肉な仮面劇のように思わせる、機知に富んだ、啓蒙的な一連の短編小説集」である、と『ドイツ人の民話』ヴィッツェンシャフトリッヒエ・プーフゲゼルシャフト版(一九七六)の編集者・注釈者ノルバート・ミラーは後書きに記している。
- (39) 『子どもと子どもびなご人のための道德的がらがら』 Moralische Kinderflapper für Kinder und Nichtkinder. 未詳。
- (40) ベネディクテ・ナウベルト Benedikter Naubert. クリストティアーネ・ベネディクテ・オイゲーニア・ナウベルト、旧姓ヘーベンシュトライト Christiane Benedikte Eugenia Naubert, geb. Hebenstreit (一七五六一—一八一九)。女流作家。古典文献学および近代文献学を独習。一七七九年最初の長編小説を発表。更に五十以上の作品を著した。物語調の作品の大部分——一八一八年まで匿名で出版——は専ら歴史的素材を基としている。彼女はこれらに空想的な諸要素や伝説の主題を織り込んだ。その他ナウベルトは感傷的な長編小説や昔話を数数書いているが、それらはエルンスト・テオドル・アマデウス・ホフマン(一七七六一—一八三二)やクレメンス・プレントナー(一七七八—一八四二)のようなロマン派の作家たちに小説資料として用いられた。
- (41) ヴィーラントの一八〇六年版 フリードリヒ・ヤコブスは第三版の序文で、「一八〇三年、作者の没後第二版編集の労を執り、あちこちを訂正し、注を施したヴィーラント」と記している。
- (42) ゲッティンゲン携帯暦 「ムゼーウス緒言」原注参照。
- (43) ホドヴィエツキイ Chodowiecki. 「ムゼーウス緒言」訳注「ダニエル・ホドヴィエツキイ」参照。
- (44) 携えた糸車もろとも老婆たちに、長い冬の間、老若の女たちが町や村の特定の家の部屋に集まり、糸を紡ぎながら物語を語り合う習俗があった。聴き手、語り手として多年こうした修練を積んだ年配の女性に、物語の宝庫とも言うべき人物が少なくなかったことは想像に難くない。グリーム兄弟に話を提供したこの種の女性として有名なのは、カッセル近郊の仕立屋ニコラウス・フィーマンの妻カタリーナ・ドロテア・フィーマン(兄弟は「フィーメニン」「フィーマンのおかみ」とメモしている)である。彼女は目に「丁字も無かったが、非常に聡明だったであろうことがその肖像画で分かる。



(45) 三ブ<sup>ト</sup>フ<sup>エイ</sup>ニ<sup>ヒ</sup>銅<sup>ハ</sup>貨<sup>1</sup> Dreier: 百分の一ターラーくらいと考えればよい。しかし、ターラー銀貨そのものの当時の購買価値は不明（新版のための序文）訳注「ターラー銀貨」参照。

(46) 一人の老兵士 当時ヨーロッパ大陸や英国の陸軍兵の兵役は極めて長きに及んだ。退役するとごく僅かな恩給で生活を賄う。体に傷病があるいわゆる「廃兵」であれば、物乞いがかつかつ暮らすことも。しかし、職業上豊富な体験を持っていたであろうから、民話を多数記憶していた者が少なくなった、と思われる。グリム兄弟も退役龍騎兵曹長フリードリヒ・クラウゼに幾つかの話の話を聴いている。お礼として古着を与えたそう。

(47) ムゼーウスは携えた糸車もろとも老婆たちに……物語っていた フリードリヒ・ヤコブスも「新版のための序文」でこのことに簡単に触れている。同訳注「齒無しの女たちや廃兵たちに……昔話を聴き」参照。

(48) 最初の三つの物語 「三姉妹物語」、「リヒルデ」、「ローラントの従士たち」。

(49) 本来ならグリムの『昔話集』の第三部「三三七ページ、四〇九ページ」とも比較され得よう 訳者には意味不明。原文は次の通り。どなたかご高教を。

.....über welche der dritte Theil von Grimms Sammlung (S.337/409) zu vergleichen wäre, .....

(50) 個々の巻の巻末に廻す こうした記述にも関わらず、編集者の注もヴィーラントの注も全て巻末七四七―七五二ページに纏められている。

## 解題

「一八四二年版序文」と標記したが、原書にはこれに当たるドイツ語は無い。代わりにムゼーウス晩年の肖像画が口絵として序文冒頭を飾っている。この『ドイツ人の民話』は全一卷豪華版として、R・ヨルダン、<sup>1</sup>G・オスターヴァルト、<sup>2</sup>L・リヒター、<sup>3</sup>A・シュレーターの原画による木版挿絵を豊富に載せ、背と表裏表紙四隅に皮革を張った立派な装幀で、ユーリウス・ルートヴィヒ・クレー<sup>4</sup>編集の一八四二年出版。扉・目次を除き全七五二ページ（うち本文七四六ページ）。一五センチ×二四センチ。縦長。巻末に六ページに亘って注が附されている。うち、末尾にW.と記されているのは、第三版を編集したヴィーラントの注。

どの画家がどの物語の挿絵を描いたかは、目次の他に、各物語の扉にも記されている。ただし奇妙なことに「誘拐」のみ挿絵画家の名がどちらを見ても欠けている。特定はできようが、あえて記さないでおく。

同書の扉は以下の通り。

J. K. A. Musäus: Volksmärchen <sup>(9)</sup> der Deutschen. Prachtausgabe in einem Bande. Herausgegeben von Julius Ludwig Klee. Mit Holzschnitten nach Originalzeichnungen von R. Jordan in Düsseldorf, G. Osterwald in Hannover, L. Richter in Dresden, A. Schrödter in Düsseldorf. Leipzig. Verlag von Mayer und Wigand. 1842.

編集者としてのクレーについて知るところはないが、「一八四二年版」の編集で、「誘拐」の挿絵画家の名を記載していないことに気づかないという点から見ても、残念ながら精確無比な御仁とは申せまい、と存ずる。そうしたことを考慮して、以下を記した。

この序文を先行する他の序文と併せ読むことにより、幾つかのことが明らかになる。

その一つがこの版に至るまでどのような版が、だれの編集によって刊行されたかである。

(1) 初版 ムゼーウス自ら編集。一七八二―八六(八七?)年。出版社未詳。フリードリヒ・ユステイン・ベルトーフ、ヴァイマルか。五分冊。

(2) 右の重版 一七八七―八八年。出版社未詳。フリードリヒ・ユステイン・ベルトーフ、ヴァイマルか。多

分五分冊。クレーは「第二版」と記しているのだが、彼自身、「緒言」に幾つかの些細な変更がある「程度で、後は無変更である旨を述べているので、単なる重版と考えてよからう。従って、没後ではあるが、ムゼーウス自ら編集、となる。

(3) 第二版 ヴィーラント編集。ヴィーラントによる序文が附され、本文にも若干手が入れられ、注も少数だが施されている。一八〇三(一八〇六?)年。出版社未詳。フリードリヒ・ユステイン・ベルトウーフ、ヴァイマルか。分冊未詳。フリードリヒ・ヤーコプスが、これを「第二版」とし、更に「一八〇三年」と明記している。

(4) 第三版 フリードリヒ・ヤーコプス編集。本文はヴィーラント編集のまま。ヤーコプスによる序文が附されている。一八二五年。出版社未詳。分冊未詳。

(5) 第四版 フリードリヒ・ヤーコプス編集。本文はヴィーラント編集のまま。ヤーコプスによる序文が附されている。一八三九―四〇年。出版社エドムント・ハイネマン、ハレ。六分冊。

(6) 第五版 ユーリウス・ルートヴィヒ・クレー編集。本文は、正書法、句読法を除き初版のまま。クレーによる序文が附されている。一八四二年。出版社マイアー&ヴィーガント、ライプツィヒ。全一卷。

#### 解題注

(1) R・ヨルダン ルードルフ・ヨルダン Rudolf Jordan (一八一〇―一八七)。画家。一八三三年デュッセルドルフのヴェイルヘルム・フォン・シャドウなどの許で働く。一八三四年「ヘルゴラント島での結婚申し込み」を完成。以来、専ら漁夫や船舶を描く。そのため頻繁にネーデルラント、ベルギー、フランスへ旅した。「フォルマンデー海岸の難破」(一八四八)なども有名。水彩、挿絵、腐蝕銅版画も試みた。本書中挿絵を担当した物語は、「奪われた面紗」<sup>ズグロ</sup>、「泉の水の精」。

(2) G・オスターヴァルト G. Osterwald. ゲオルク・ルードルフ・ダニエル・オスターヴァルト Georg Rudolf Daniel Osterwald (一八〇三―

八四。画家。石版画家。まずボンの上級鉱山監督局製図部に勤務。それからボン大学に学び、のちミュンヒヒエン大学で教育を完了。ミュンヒエンでは鉱山学校でも教えた。一八二五—二八年、ベルン近郊ホーフヴィールのフェレンベルク学院で製図教師を務める。一八三〇—三二年、パリで絵画を学び、次いでハノーファーとドレスデンに滞在、やがてケルンに居住。一八六四年にはプロイセン国王ヴィルヘルム一世（在位一八一—一八八、一八七一以降はドイツ帝国皇帝でもあった）から王室教授の称号を与えられた。風俗画、風景画、肖像画、建築画等を描いた。その他石版画、腐蝕銅版画をも製作。

本書中挿絵を担当した物語は、「リプツサ」、「愛神となった精霊」。

(3) L・リヒター J. Richter: アードリアン・ルートヴィヒ・リヒター Adrian Ludwig Richter (一八〇二—一八四)。画家。図案家。まず銅版画家である父カール・アウグスト・リヒターの子となったが、次いで、十八世紀後半の市民芸術における著名な画家にして銅版画家ゲニエル・ニコラウス・ホドヴィエツキイ Daniel Nikolaus Chodowiecki (一七二六—一八〇二)の腐蝕銅版画技法を本とした。一八二二—二六年イタリア、特にローマに滞在。一八二八—三六年マイセン図案学校の教員、その後一八七六年までドレスデン美術専門学校教授を務めた。ドレスデンでは間もなく木版画を始め、これが次第に彼の芸術活動の主流となり、民衆に目を向けさせた。ドイツの日常生活ののんびりとした叙景、愛すべき謙謙、豊かな空想力により、挿絵画家として一世を風靡する活躍をした。ドイツの木版画を大いに振興するのに役立ったこれら挿絵が飾った書籍として、フリードリヒ・シラーの『鐘の歌』、ヨハン・ベーター・ヘーベルの『アレマン詩集』、ムゼーウスの『ドイツ人の民話』やルートヴィヒ・ベヒシュタインの『ドイツ昔話集』(一八五七)などが挙げられる。更に一言しておこう。ロマン派の画家として極めて著名なリヒターは、幼少時に兄から『ドイツ人の民話』をもらい、この本にうっとり読み耽った挙句、将来是非ともこれに挿絵を付けてみたいと熟望したそう。

本書中挿絵を担当した物語は、「リヒルデ」、「リューベツァールの物語」、「愛の信実」、「沈黙の恋」、「メレクザーラ」、「宝物探し」。

(4) A・シュレーター A. Schröder: アードルフ・シュレーター Adolph Schröder (一八〇五—七五)。一八二〇年以降ベルリンの版画家ルートヴィヒ・ブーフホルンの弟子として銅版画技法を修行、一八二七年以降ベルリン美術専門学校で絵画に専心、一八二九年デュッセルドルフのヴィルヘルム・フォン・シャドウの許に赴き、一八四八年まで滞在。その後フランクフルト・アム・マインで暮らしたが、一八五四年デュッセルドルフへ戻った。一八五九年カールスルーエ工業専門学校の装飾術教授に招聘され、一八七二年まで留まる。建築物帯状装飾の大家として令名があるが、挿絵の分野でも多数の楽しい作品を残している。アーデルベルト・フォン・シャミツソ著『ベーター・シュレミールの不思議な物語』、ムゼーウスの『ドイツ人の民話』、ルートヴィヒ・ウーラントの幾つかの譚詩など。

本書中挿絵を担当した物語は、「三姉妹物語」、「ローラントの従士たち」、「屈背のウルリヒ」。

(5) ユーリウス・ルートヴィヒ・クレー Julius Ludwig Klee 未詳。

(6) Volksmärchen ムゼーウスもそれに続く一八四二年までの諸版の編集者も、「メルヒェン」を Märchen〔現代の正書法では Märchen〕と綴っているようだ。「メルヒェン」という片仮名表記が近似値か。ただし本訳書では、原綴がこの場合でも、片仮名表記は全て「メルヒェン」で統一した。